
碧眼の女神

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧眼の女神

【Nコード】

N2233R

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

二〇四四年。

神を信じていたが信じなくなったという少年。

少年は昨日までと変わらぬ朝を迎えた。

その日に少年の日常に大きな変化が訪れることも知らずに…。

ミステイッカーの実験をしている町として機能している

「実験施設の町『EFFT』(Experimental Facility Townの略)」と名付けられた町でミステイッカーや「とある組織」とガチンコバトル小説…という訳ではないけど

厨二病作品であることは間違いない。

元ネタもあると言えばあるけど、あまり深くは関わらせないようにしているかと思ってます。なので原作名は入れてません。まあ、二次創作だろ、これとか言う注意があれば原作名書いときます。因みに言うと駄作です。めっちゃ駄作です。駄作の他に表現の仕様がありません。それでも試しに、と読んでくれる人時給500円で募集中(嘘)。

？章『神』（前書き）

1話目はこれといった変化もなしで、主人公の日常を書いたものです。

だから、「すごく」「つまらないです。でもまあ、読んでみてくださいいな。

？章『神』

皆は『神』と言うモノを信じるだろうか。

皆『神』とは何か、一度でも考えたことがあるだろう。しかし、結局その答えにたどり着く場所などあるのだろうか。俺は神を信じようとして失敗した人間の一人だ。神を信じたくても実態がない故に完全に信じることはできなかった。皆は神をなにだと思っただろうか。自然か。万物か。この世界自体か。それとも、

人間か。

目が覚めた時、そこは異空間だった！等ということはなく、いつもの家の真つ白な天井だった。後頭部を掻きながら上半身をベッドから引き剥がす。時計を見ると、今は午前7時。学校が始まるまでは、まだまだ余裕がある。ベッドから立ち上がるまでに時間が掛かった。…実際は数秒の出来事だが、あまりの眠気に頭のネジが緩んでいるのかもしれない。とりあえず制服へと着替えを済ませるため、1階へ降りることにする。

着替えが終わり、洗濯から乾燥、皺伸ばしまですべてを自動でやってくれる洗濯機へと服を放りこむ。1階では、無機質な家具が幾つか置いてありその周りは雑誌やら漫画で散らかっていた。帰ったら掃除をしよう決めてから椅子に座り、昨日買ったパンを開封。パンを口に銜えたまま行儀悪くTVを付ける

画面には朝に相応しくない議題にそって話をする男たちが映った。一人の男は荒々しく息をしながら議題に沿った自分の意見を言う。『私は神を信じます。神がいなければこの世界はできなかった筈です！』

もう一人、反対側に座った体格のいい男は落ち着いた素振りて首を横に振り、反論する。

「神などいません。地球や、生物は偶然で生まれたのです」
あれを言えばこれを言う、それを言えばあれを言うと言った感じだった。朝にこの話はないだろう、とTVを別番組へと切り替える。そこには、先ほどまでの現実離れして、地に足がついていない話などよりずっとマシな朝のニュース番組が流れていた。しかし、ニュースの内容はアホらしいものだった。話によれば、昨日未明、俺の家の近くの通りで発光する『何か』を目撃したと言う話であった。その目撃者も一人ではないらしく、次々と目撃者が証言してゆく。
「……くっだらねえ」
TVを消して時間を見る。7時45分。そろそろ学校に行くことしようとして、立ち上り鞆を背負って玄関を出る。
意外と強烈だった日光に目が眩んだ。眩い日光が俺を包みこんでゆく。

？章『神』（後書き）

うわ、本当につまらない。

はい、どうも作者です。1話目が思った以上につまらなくなりました。

とあるネトゲの掲示板で自己満足小説を書いていたら、このサイトを紹介されたので、始めてみました。ストーリーの展開や文章力は期待しないでスウィートよりも甘い目で見るとすごく嬉しいです、はい。

2話目からはドンドン展開させて行こうと思つので、興味持った人いたら是非、続きも読んで行ってくださいな。

…あとがき、短いけどこれでいいのかな。普通に小説読んできるとかなり長かったりするけど…。

とりあえず、今後ともよろしくです。

？章『少女』

いつもの学校への通い道。大人たちは会社へと急いでいる。エンジン音等がまったくくしない、エコカーももう古くなつた世界。今や車のエネルギーは、空気全てだ。エアカーとも言ったかな。車の前方から空気を一気に吸い込み、それを圧縮しそして後方へとその空気を移し、それを爆発的に開放することで前へ進むらしい。しかし、今やそのエアカーの時代も終わろうとしている。

…昔は不可能だと叫ばれていたことも、遠い昔。今は不可能を可能にする時代へと変わっていた。

今やこの世界は『科学』に包まれ、あらゆることは科学で証明できる時代であった。しかし、神の存在云々は未だ信じる者がいた。何故かはわからないが。…俺もそのうちの一人であった。と言うのも、もう過去形なので話す意味等ないのだが。

「おい！あぶねえだろ！何所見て歩いてんだ！」

歩行者用道路の真ん中で喧嘩をしてるらしい声が響く。人々はちよつと視線を声のする方へ移すだけ。これといって気にも留めず、すぐ自分の行くべき場所を目指して早歩きを始める。学校という表現ながらも学校として機能してない場所へ向かう俺から見れば最高の暇つぶしだ。そう思って、俺は喧嘩の音がする方へ歩き出す。

見ると、そこには小さな女の子とスーツに身を包んだ男が言い争っていた。…この表現は良くないな。男が一方的に怒鳴りつけているという感じ。女の子は銀色の長い髪を靡かせながらも、目を伏せて謝っていた。それでも尚、男は怒鳴りつけることを止めようとしなかった。

「おい、おっさん。この子謝ってるんだしさ。許してやれよ」

男は俺が割り込んでくるとは想像もしていなかったらしい。ちよつと吃驚した感じに顔を固めさせたが、それでも怒鳴り声を張り続ける。

「こいつがぶつかって来たんだぞ！？なんで俺が悪者みたいに言われなくちゃいけないんだよ！」

「悪者みたいに見えらからおっさんを注意したんだけど？」

「な…なにい!？」

「俺は周りから悪者みたいに見えたら実質どうあれ悪者だと思うようにしているんだ。悪者じゃない奴は悪者に見える様な行動はしないでだろうからな。…てか、ぶつかるのなんてお互い様じゃんか」

「ぬ…ぐっ…う」

男は何か言い返そうとしていた様だが、フンツと鼻を鳴らして踵を返し早々と場を立ち去った。

「おい、大丈夫だったか？」

俺の隣に立つ女の子に目を落とす。身長から考えて小学高学年…いや、十歳そこらの様だ。銀色に輝く腰にまで届いている髪を靡かせお礼をしてくれる。

「ありがとう。おにいちゃん、優しいんだね」

その笑顔は無邪気という表現が一番似合うモノだった。

しかし、気付きたくないことに気付いてしまった。その少女の手の甲に刺青の様なモノがあった。龍の様な紋章、という表現が一番しっくりくるだろうそれは青色に輝いているようにも見えた。いや、実際に輝いていた。青のダイヤモンド…サファイヤだ。刺青の中心にサファイヤが埋め込まれていた。これはこの子が望んだものじゃないと思っただ。十そこらの年齢の女の子が刺青をして宝石を埋め込むなど聞いたことがなかった。

あまり深く関わらないでいたかったから礼に対して無言を貫き踵を返し、通学路へと戻った。

授業に集中できなかった(元々授業中は小説を読んでいるのだが)。
ずっとあの女の子のことを考えていた。刺青…自分の望んだのでなければ親か。それとも、最近増えてきている危ないマッドサイエントティストだろうか。銀の長い髪を靡かせ深くも淡い碧い眼。

全てが作りモノの様な美しさだった。

「あつきゅん！食堂行こうぜ！」

ちなみに、「高木 彬」。それが俺の名前だ。

「あつきゅん、てなんだよ。…おう、もうそんな時間か。おまえ今日なに食うの？」

俺の友人、「喜原 直人」は親指を俺の顔に突き出し、周りの迷惑などお構いなしに大声で宣言する。

「勿論！カレーうどんだけ！」

「お前本当にカレーうどん好きだな」

この俺の目の前にいる、微妙にテンションが高い男は俺が心を許せる十数人の友人のうちの一人だ。髪の毛は極普通。黒色の髪に黒色の瞳。

「止める！そんな目でおれ見るな！HG！」

「誰がハードゲイだ！てか古いよ。何十年前の芸人だぞ…？」

いつの間にか、こいつの瞳を覗きこむような形になってしまったらしい。どうも今日は調子が狂う。朝、頭のネジが緩んでいた、思ったがネジを緩めすぎてどこかに落としてしまったのかもしれない。帰る時はネジが落ちてないか探すことにしよう。

？章『少女』（後書き）

前書き、何を書けばいいのか分からない。

ちなみに、ちよつとだけとある漫画と関与しています。

てか、なにもないんだよね。書くこと。いや、思いつかないだけなんだろうけどさ。

3歩進むと記憶が抜けおちていくのもまた俺の特徴です、はい。

まあ、なんとというかドンドン展開していくと言っておいて展開してないですね。これからの展開に期待してくれると嬉しいですよ。

？章『運命』

食堂ではその直人の目の前には宣言通りカレーうどんが置かれていた。俺の目の前には懐かしの味として親しまれている醤油ラーメンが置かれているが、ずっと考え事をしていた所為か時間がずっと早く感じられ空腹感というモノが生まれてない俺はズズツと麵を一口啜っただけで箸が止まった。

「そういえばさ、お前、朝に喧嘩に割り込んでたよなあ」

「ブホアツ！な、なんだよ。見てたのかよ」

啜っていた麵を吐き出してしまう。

「当たり前だろう。俺の通学路でもあるんだから」

まさかあのシーンを見られていたとは思わなかった。ていうか見られていたという事実を否定したかった。ああいうのは柄じゃないのだ。

「カツコ良かったぜえ、お前。知らないかもしれないけど、通行人Aが『すげえなあ』って呟いてたからな」

「誰だよ…通行人Aって」

照れ隠しに麵を一気にゾゾツと口の中に滑り込ませる。

「あつはつは照れるなよ。人助けしたんだしょ！」

全くこいつは…と呆れてから麵を一気に口の中へ無理矢理運び、いつの間に食べ終わっていたのか、直人と共に食堂を出た。

5時限目が終わり帰宅時間になった。一緒に寄り道しようという直人の誘いを断り本屋を目指しているときだった。聞き覚えのある声が俺を引きとめた。

「ねえ、朝の助けてくれたおにいちやんだよね？」

手の甲を見るとやはり刺青と宝石が埋め込まれていた。

「ああ、そうだけど？なに？」

そんな返事しか返せない俺に、サファイヤの宝石に負けない輝きを持つ青い瞳が俺を真っ直ぐに見詰めていることに気付き、ちよっと恥ずかしくなってきた。

「あなたは神を信じますか？」

急な問いかけに、俺は驚いた。寒い季節だと言つのにミニスカートを穿いている（まあ、最新技術で地面から暖かい空気が流れる様になっっているのだが）少女を見開いた目で見つめてしまう。

「あなたは、神を、信じますか？」

回答しない俺にもう一度強調させながら聞いてきた。さすがに回答しない訳にもいかないと思い、とりあえずで適当に答えを言うことにする。

「神は…信じないな。信じてたけど、もう信じられない」

思つたままの事を言う。少女はちよつと俯いて寂しそうな顔をしてからまた笑顔になつて。

「そう、答えてくれてありがとう。じゃあ、逃げて」

…え？と困惑した。急に逃げてと言われても何事か分からない。

「ああ、もう！早く逃げないと来ちゃうよ！」

少女は俺の背中を押し、無理矢理俺の目的地と真逆の方向に歩かせる。

俺は何事か分からず少女の顔を見ようと思い後ろを振り向く。そして少女の言つてることの意味が分かった。分からないけど分かった気がした。追いかけてきているのだ。「何か」が、「何か」を追いかけてきている。そして、少女は俺を十数歩歩かせた後背中から手を離し、急に大声で叫ぶ。

「なんで、この私をそこまでして捕まえようとするの！？何故、私には自由を与えてくれないのだ！アフロディーテの生まれ変わりとか…意味分かんないよ！」

口調が変わつてる。にしても…アフロディーテ？確か、美とか戦の女神だと聞いたことがある。

しかし、今はそんなことどうでもいい。追いかけてくるモノの正体ははつきり言っただけ分らない。外見は黒いマントに身を包んだ人間ゆっくりとした歩調でこちらへ向かってきている。

「あ、ああ……なんだ……あれ……」

あまりの恐怖に尻が地面に着く。

かなり情けない恰好でかなり情けない声が出てしまっているがそんなこと気にしてられない。黒いマントに身を包んだ男はゆっくりながらも近づいてくる。しかも、一人や二人ではない。6人だ。そして6人とも同じ髑髏の様な面を付けている。

「うう……仕方ないか」

少女はちよつと躊躇ってから俺に顔を向けて聞いてきた。

「ねえ、おにいちゃん。これから私がいづらを蹴散らしたいんだけど……その……なんていうか、私のこと嫌いにならないでいてくれる？」

少女はさつきと同じ感じの寂しそうな眼をしていた。

「う、うん」

俺はなんとか頷いた。まず、嫌い好きもあんたとは赤の他人ですけどとは言っ暇がない。俺は恐れた。少女は嫌いにならないで、と言ってきた。奴らを蹴散らすと言った。一体どんな残酷なショーが始まるのか想像したくなかった。そもそも、この少女が何をするのか想像したくなかった。(想像できなかつた、というのが正しいが……)

「ありがとう、おにいちゃん……」

少女は刺青とサファイヤが埋め込まれている手の甲を黒の集団に向けてると、そつと呟いた。

「シンフォニクス」

俺を含む全てが光に包まれた。

あまりの眩さに目を伏せていたが、なんとかゆっくりと目を開ける。もう数歩分しかない距離にいた黒の男たちはいなくなっていた。代わりに、碧い薔薇の花弁が空から降って来た。その光景は俺の想像していたものとあまりにもかけ離れていて、そして、あまりにも

「…綺麗じゃん」

そう、綺麗だった。碧い薔薇、というのは聞いたことがないがそれでも産まれてから最高に美しいと思った瞬間だった。しかし、その「綺麗」という言葉に少女は自分の手の甲を擦りながら小さくぽつりと言っ。

「綺麗なんかじゃ、ないよ。怖ろしい力。こんな力がなければ相手にされないで済むのに…」

少女の目から数滴の涙があふれていた。何故か胸が苦しくなる。まるで自分が泣いてしまっている感覚。そして、少女の顔が上にあるということに気付き自分の体勢を見る。情けなく座り込んでいた。うわわ、と急な羞恥心に襲われ立ちあがるうとするが腰が持ち上がらない。

「…どうしたの」

少女は俺の方を見て不思議そうに見ていた。立派なことに、もう涙は流れていなかった。

「こ、腰が抜けて足が動かない」

少女はぼかん、としたような顔をした後ちょっと苦笑していた。

？章『運命』（後書き）

はい、だんだんと意味が分からなくなってくる頃でしょう。

…にしても寒い！手が震えてタイピングミスが酷かったりします…。
地球温暖化が進んでずっと夏になればいいのに…。

でも、そうすると夏が大変だなあ。

後書きがもう作品と関係なくなってしまうでしたね…、まあこれからも読み続けてくれると嬉しいです！

？章『居候』

何故、こうなったのだろうか。どうもあの時、暇つぶしという理由で喧嘩に割り込んだ時からこの運命は決まっていたのかもしれない。

家への帰り道、何故かあの少女が隣で一緒に歩いていた。しかも有難迷惑なことに俺にいろいろ、説明をしてくれやがった。

少女はアフロディーテの生まれ変わりと言われ、5歳の時、ある組織に強制的に連れて行かれたそうだ。女神の生まれ変わりと言われながら保護と言う名の監禁をされた少女は語る。大層丈夫な鎖で四肢の動きを封じられ、飯も質素なモノ。服は親が持つてきてくれたものがあつたらしいが、今は一着だけだそうだ。しかし、そんな話はただ俺の怒りに火を付けるだけであつた。

アフロディーテの生まれ変わりだかなんだか知らないが、5歳の子供を監禁するなんざまともじゃない。そして今10歳程度だとして5年間も監禁していたことになる。同情よりも怒りがあつた。その監禁していた野郎共を5年間くらい殴り続けたいと思つた。唇を鉄の味が充滿するのも構わず噛みしめる。

「更に言つちやうと、この手の甲のサファイヤはその組織に強制的に埋め込まれたの。このサファイヤは戦に関する願いを叶える力を持つてるんだつて。…こんな力要らないのにね…」

瞳を伏せながら、悲しいことをドンドン告げていく。

「てか、私。女神の生まれ変わりとかじゃないんだよね。普通にお母さんいたし、お父さんもいた。弟もいるらしいんだけどね」

「いるらしい、つて…?」

何故質問してしまったのだろうか。少女が思い出したくないことだろうに…。

「弟の顔見る前に連れていかれちゃったんだよ…。お母さんが会わせてあげてつて何度もお願ひしたらしいんだけど、結局見れずじまいなんだ。あーあ、早く弟の顔見たいなあ」

悲しいそんな顔で空を見上げる。たぶん、弟の顔でも想像しているのだろうか…。

「大丈夫だろ。お前結構可愛いし、弟も今更美少年になつてるだろ
うよ」

「…そう、だね。うん、そうだといいなあ」

本当に子供なのか、と疑うほどの雰囲気醸し出しているこの少女は一体どれだけの悲しみを背負っているのだろうか…。俺には想像ができなかつた。

「泊めて」

「……………は？」

家の玄関前に到着した、と思つたら少女は真つ直ぐな目をして言つた。

「今日一晩だけでもいいから泊めてくれないかな？」

「はあ、分かつたよ。一晩だけだからな」

何故だろう。ホントは断りたかつたのに、いつの間にかそんなことを口走つていた。やはり断ろうと思つた時には時、既に遅し。

「ホント！？ありがと、おにいちゃん！」

満面の笑みが、そこに咲き誇つていた。

まあ、いいか。今日は美少女と一つ屋根の下、一夜を共に過ごす
つて感じにすれば。

？『追手』（前書き）

前書きを説明代わりに使っちゃってもいいよね！

ミスティッカー。

ステッカーの様に貼ってなぞるだけで「火」「風」「氷」「電気」「光」と言ったエネルギーを放出させる。

彬が住んでいる街はそのミスティッカーの研究施設である。

「電気のみスティッカー」を貼り、車を動かすことができるという所まで実験は進んでいた。

てか、これって二次創作かな…？

？『追手』

体の節々が痛い。只今俺は、朝ごはん用のトーストにバターを塗ってるのだが、とにかく体が痛いです、はい。ソファの寝心地がここまで悪いとは思わなかった。昨日、ここに一晚泊することになった少女が俺の部屋にあるベッドを独占してしまったのだ。故にソファに寝ることとなったのだが…

「あー、痛い。首の骨折れてるんじゃないかねえのか？」

という感じに体が痛いのであった。今日ほど痛いという言葉をここまで連呼したことがあっただろうか…。

「うにゃ〜。ねむい〜」

俺のジャージを着てテーブルに突っ伏し呆けているこの少女こそが、俺から安らぎを奪った者である。

「本当に眠そうだな…。『渚』は学校とか無いんだし、まだ寝ててもいいんだぜ？」

コップに牛乳を注ぎ少女の前に置いてやる。

『渚』というのはこの少女の偽名である。てか、アフロディーテとか呼びづらいんだよ。その渚は猫の様に左手の甲で顔を擦りながら、

「ありがと〜」

と、礼を言いながら牛乳を飲む。

……………おい、こら。

「渚、態々コップに注いでやったんだから、牛乳パックの中身を飲み干すのは止めてくれ」

「うにゃ？あ、コップに注いであったんだ。気付かなかった」

…まあ、いいか。

「昼飯用にカップラーメン置いていくから。…作り方は分かるな？」
一応確認をする。コップに注いであるのにも気づかない様な奴なんだ。カップ麺の作り方が分からないという場合も否めない。

「さすがに分かるよ。お湯入れて3分でしょ？私を子供扱いすると私のサファイヤが火を噴くぜえ！」

「そいつは勘弁」

てか、冗談に聞こえないから。

「そんじゃ、学校行ってくるからな」

「いつてらっさ〜い」

玄関に向かい靴を履く。渚も何故かは知らないが玄関に向かってきた。その時、

ガシャガシャガシャ！と扉が激しく揺れた。覗き穴から外を見ると

…昨日見た髑髏の仮面が目に映った。

「…渚、逃げる準備しとけ」

俺はストレージ・ミスティッカー専用のポーチの様な物 - から光のミスティッカーを取り出す。そして光のミスティッカーを床に貼り、なぞる準備をしてから扉の鍵を開ける。

開けた瞬間扉が威勢よく開き放たれた。そして俺も光のミスティッカーをなぞる。瞬間その場が光に包まれる。髑髏の仮面が一瞬の出来事に体勢が崩れた。その隙を見て渚の手を引っ張り逃げ出す。

どうも、彬です。走ってます。かなり危険です。俺は今学校に向かつて走っている。髑髏の集団から逃げるために。学校への通学路は通勤ラッシュ時とても人が多くなる。現時刻は八時ちょっと前。予想通り人通りが多い。これだけの人がいるなら奴らも下手に手出しはできないと思う。何より学校に入ればこっちの勝ちだ。教師やら警備員やらに捕まるだろうからな。

そして、数分走り続けやっとの思いで学校の校門が見えてくる。しかし、そこに待っていたのは地獄だった。先回りされたのだ。髑髏野郎が三人校門の前に立っていた。

「クソっ…マジかよ！」
俺は進路を変更。すぐ近くに在った裏路地へ入る。本来裏路地などには入りたくなかった。狭い上に人が少ないからだ。だが、この場合そんなことも言ってもらえない。三人は尚も追いかけてくる。

何度か曲がり、自分でも何所にいるのか分からなくなる頃。やっ
と髑髏野郎共の足音が消えていった。

「はあ…はあ…、なんなんだよ…あいつら」
背中を壁に預け座り込み息を整える。渚も俺の正面で屈みながら息を整えていた。

ぼやける視界の中、壁にミスティッカーが貼ってあることに気付いた。最近の精神年齢が低い奴らが自分の縄張りにレアなミスティッカーを貼り自慢しているのだ。

その中にとてつもない存在感を持つミスティッカーがあった。
髑髏の口から刃が出ている感じのイラストで、基調とされている色は黒。光のミスティッカーだろうか。

何かに使えるかもしれない、とその壁に貼ってあるミスティッカー

ーをストレージにしまう。ただ、髑髏のミスティッカーだけは手に握っていた。

「おい、いたぞ！」

野太い声が響く。見ると、そこには先程の三人が立っていた。後ろは壁。まさに絶体絶命である。

「おい少年、一つだけ忠告だ。それに関わらない方が身のためだぞ。我々は君の寿命を短くしたくない」

寿命を短くするという遠回りな言い方を酸欠状態の脳が解読するのに時間がかかった。

しかし、それでも何とか解読し、それは俺の命を奪いたくないと言っていることが分かった。

「…断る」

短くそう伝えると真中に立つ他のモノよりも背が高い男が1歩踏み出し俺を見下す。

「そうか、なら勝手にしろ。…少年の命を取るのに五秒間待つてやろう。その間に逃げるなり最後の別れの言葉を交わすなり好きにするがいい」

「逃げて、おにいちゃん」

渚の言葉を無視する。俺は逃げない。別れの言葉なんて交わさない。ただ、髑髏のミスティッカーを冷たいコンクリートの上に貼った。

「五」

髑髏のミスティッカーをなぞる。

「四」

しかし何も起きない。

「三」

もうダメなのか…？

「二」

！声が聞こえた気がした…。

「一…ここまでだ。では、その命奪わせてもらおう」

俺は俯いていた。渚が必死に俺の体を揺すぶっている。俯いている

のは絶望しているからではない。驚いているのだ。

俺が驚いている間にも男はゆっくりとした歩調で近づいてくる。渚は俺を逃がすのを諦めたらしく、男の前に立つ。見ると、あまりにも頼れるような背中じゃなかった。渚は右手の甲を相手に向け、言う。

「シンフォニクス！」

あまりの眩しさに目を閉じる。光が収まり目をゆっくり開けると、渚が…震えていた。

？『力』

「あ、ああ…な、なんで？」

相手三人のうち、二人はいなくなっていた。しかし、真中に立つ男は何事もなかったかのように立っていた。

男の手には『魔法の杖』の様なものが握られていた。

「ふ、ふふ。この『異力の破壊』があれば、女神の生まれ変わりなんてただのガキだ。怖いモノなんて何も無い…！」

渚の震えがこつちにも伝わってきそうだった。

「そ、そんな…。だって『異力の破壊』って…。」

声も震え、既にいつもの渚の姿はなかった。怯える小動物の様だった。

「そうだ、『異力の破壊』たるこの杖は一人の男しか使えない」

「その男は今監獄にいるはずよ…！あり得ない」

男は一步また一步とゆっくり近づいてくる。

「残念だが、我はラスールだ。髑髏の仮面で分からなかったか？…」

アフロディーテ…お前の所為で私は恥をかいた。そのお返しだ」

渚はゆっくりしゃがみ込んでしまう。

男は尚も止まろうとせず渚をスルーして、俺の目の前に来る。

「まずは、お前を殺そう。いろいろ手こずらせたお返しだ。死ね」

俺の頭に男の手が触れようとした、瞬間しゃがみこんでいた筈の渚が俺を庇う形で男の前に立つ。

やはり、小刻みに震えている。

「この人には何もしないで…、お願い…」

男は髑髏の中身で不敵に笑っているだろう。「クッククク」という声が聞こえる。

「いいだろう、その少年は元々関係ない奴だったのだからな。…おら、立て！」

男は強引に渚の腕を引っ張り立たせ、そのまま踵を返し歩き出す。

渚が一瞬俺の方を見た。その時何かキラキラとしたものが飛び散った気がした。

「止めるよ……」

渚とやりたいことがまだいっぱいあるんだ。「あいつ」にできなかったことをしてやりたいんだ！

服と一緒に買いに行きたい。パフエとか買ってやりたい。誕生日にはケーキを買ってやりたい。

渚に「おにいちゃん」と呼ばれるたびに俺の中でいろんなものが満たされていく感じがするんだ。

「あの時」の様な後悔はもうしたくないんだ…。

だから…だから神様、頼むよ…。これ以上、俺の大事なモノを奪わないでくれ！あの寂しそうな瞳をする少女を守ってやりたいんだっ！

何かが鼓動を打った。俺の心臓か、それともこの髑髏のミスティアッカーか。

渚を返せ。返せ返せ返せ返せ！

「渚を………返せ！」

制服の袖を捲り上げ、髑髏のミスティアッカーを腕に貼る。そして、ミスティアッカーを左目・右目の順で軽く叩き刃を指先でなぞる。

俺の手に現れたのは、黒の大剣だった。

？『黒の大剣』

「これは…」

恐怖のあまり体が強張る。

ミスティッカーをなぞると、手には黒の大剣が現れた。

鐔の代わりに頭蓋骨、柄も骨仕様。両刃の大剣には左右対称の模様が付いている。

黒光りした刃からはとてつもない威圧感を感じられる。

こんなもの俺が持つてしまつていいのだろうか、という疑問が生まれるほどだった。

「少年…それはなんだ？」

さっきの「渚を返せ発言」を聞いて振り向いたらしい髑髏野郎が聞いてくる。

「俺が知りたいくらいだよ…」

頭に直接この大剣の使い方が伝わってくる。

ドクン、ドクン、と心臓が大きく鼓動する。

渚も瞳を涙で濡らしながらも驚愕の顔で俺を見ていた。

「渚、お前それでいいのか？戻つていいと思うのか？」

渚は俯いてしまい言葉を発さない。

そして数秒後、やっと返事をしてくれる。

「そりゃ、戻りたくないよ…。あそこ辛いもん。…それに、おにいちゃんともまだ一緒にいたい」

「なら話は簡単だ。俺の所に戻つて来いよ」

渚の居場所はここだ、と言ってやる。まだ会つて間もないけれど、「あいつ」の時の様な後悔はしないつて決めたから。言つてやる。

「で、でも…それじゃおにいちゃんに迷惑が…」

「俺が迷惑とか迷惑じゃないとか関係ない。俺も、お前と一緒にいたい！これ以上後悔がないつてくらい、一緒にいたい」

俺はこんな子供相手に何を言つてているんだらうか。これでは、ま

るで好きな人に告白してるみたいじゃないか。

なんてことを思っているのと、赤面しそうだから思想を打ち切る。その代わり剣を構える。

こんな大剣持ったこともないから、構え方は分からないけど。ゲームで見たことがある構え。

腰を低く落とし、剣を前に突き出す。刺突の構え。

「ふ、ふふ。その大剣で君が何をやる気か知らないが…素人が扱える代物ではないと思うが？」

その嘲弄とも言える言葉に耳を貸さず、俺は不敵の笑みを浮かべる。

「うおおおおらあああああ！」

そこまでの脚力がないが、相手との距離は数歩。ちょっと駆ければ2秒くらいで懐に潜り込める。

「残念だが…お前に私は斬れない」

「……………!?!」

『異力の破壊』を出すと思ったが、違った。男が俺の前に出したのは渚だった。

「う、うう。離して、よお！」

さっきまでの諦めが嘘のように渚は暴れていた。髑髏野郎は渚の片腕を掴んでいるだけ。なら…!

「渚、手を！」

渚に左手を差し出す。渚は右手で俺の左手を掴む。

髑髏野郎は渚を離す気などないだろう。だから、離させるとまではいかなくても渚を引き寄せせる。

「はあっ！」

「ぬお!?!」

渚が髑髏野郎の握力から解放される。

渚を引き寄せた際、相手の脇腹に黒の大剣を突き刺したのだ。しかし、傷痕は見当たらない。

「な、なんでだ…?」

そのまま鬮體野郎は倒れた。俺は、なにがなんだか分からない。

「おにいちゃん、逃げようよ」

確かに逃げるのなら今がチャンスだ。顎を引いて渚に同意を示してから、渚の手を引いて来た道の記憶を辿り、学校のある方向に向かう。

…しかし、このミスティッカーは何だったのだろうか…？

？『魂喰くネクロマンサー』

学校に行くのも面倒くさくなり、渚とマクドを目指していた。手には髑髏のミスティッカー。一体これが何なのか…。

「あ！俺のミスティッカー！ちよつと待て！その少年」

声が聞こえた。後ろを向いた。一人の男の顔が俺のすぐそこにドガツ。

殴ってしまった。

「ぐほあ！痛い！なんだ？最近の若者は出会い頭に人の顔面殴るの？！」

「あ、いえ。すみません。顔がすぐそこにあつたもんで、遂」

頭を掻きながら謝罪を表す。倒れていた男の格好を見ると紺色を基調とした服に帽子を深く被っている。髪の毛の色は…ピンク？紫？なんだか変な髪だ。目は髪に隠れて見えない。

「ま、まあいいや。とりあえず、そのミスティッカーなんだけど。

俺の何だよ、返してくれ」

「べ、別にいいですけど…：すいません。このミスティッカーさつき勝手に使っちゃったんですけど…」

そう言つと男は驚いて目を見開いた。…実際は、目がどうなってるかは見えないけど。

「え！？つ、使つたの？ネクロマンサーを？」

ネクロマンサー…？このミスティッカーの名前か？厨二病の臭いがぶんぶんするぜ。

「はい、腕に貼つたら大剣出てきたんでビビりましたよ」

「ふむ……」

男は顎を指で掻きながら、何か悩み始めた。渚は俺の服を引っ張つて「早く食べに行こうよ」と言っている。その渚に「もうちよつと待て」と宥めてから男が言葉を紡ぐ。

「君、ちよつと話をしないか？」

さつきまでのおどけた感が抜けて真剣な口調だった。

「…いいですけど、マクドでいいですか？」

「奢ってくれるならOK」

そんなこんなでマクドに到着。ちなみに、ホントに奢らされた。
チクショウ…。

「で、このミスティックカーなんだけどね」

俺と向い合せの形で座る男はネクロマンサーをヒラヒラとしながら語り出す。

「これは武器系ミスティックカーって言うレアミスティックカーでね。
エネルギー系ミスティックカー違って、身体に貼ってなぞり貼った人間に精神力を元に実体化するんだ」

男はポテトを頬張りながら話を続ける。

「んで、その力を発揮できる人のことを『ブレイザー』って言うんだ」

すると男は突如ストレージから火のミスティックカーを取り出し、腕に貼ってなぞる。

「ええ！？危ないっすよ！」

「いいから見てろって」

すると、腕が炎に包まれる。渚は目を丸くして「おお、ビューティフルファイアー」等と言っている。…炎の何が美しかったのかは分からないが。腕を炎に包んだ男は痛くも熱くもないように語り出す。

「この通り、ブレイザーはエネルギー系のミスティックカーも操ることができる。…この町では今ノラブレによるミスティックカー犯罪が大きくなっている」

ミスティックカー犯罪…？あ、炎消えた。

「そんな犯罪、聞いたことありませんけど…」

「ああ、政府側が伏せてるからな。そして、そのミスティックカー犯

罪から人々を守り安心な生活を支援している存在が最近作られた組織。『ガーディアン』だ」

「ガーディアン…ですか？なんか良くありそうな名前ですね」

「うるさい。んで、本題なんだけど君にはブレイザーの素質がある」
ハンバーガーを頬張りながら俺が言う。

「そんなこと言われても…。残念ですが、俺はブレイザーとかガーディアンとか興味ありません。ミスティッカーだって生活に必要なってことだから仕方なく買ってるだけです」

ナゲツトを頬張りながら男が言う。

「それがいいんだよ。ブレイザーの力に興味を持ち、力を欲するとノラブレと同じになっちゃうから」

「さっきも出てきましたけど、ノラブレって何ですか？」

男の顔がまた真剣になる。持っていたコーラを置いて返事をしてくれる。

「ノラブレって言うのはブレイザーの力に変えられて強さを求める者。ブレイザーの力を使って犯罪する者。要は野良で動き回るブレイザーをノラブレと称しているんだ」

「ノラブレ…ねえ」

大層興味なさそうにポテトを噛み砕く。

『ブレイザー』

数時間くらい経過。

「ポテトつま」

渚は頬が落ちてしまいそうな緩い顔になっている。

「その子は随分と空気を読まないねえ……」

「すみません……」

謝罪しながら、どうやって付いたのかは分からないが、渚の頬のケチャップを拭う。

まあ、そんなこんなでいろいろ説明を受けたが、然程、興味をそそる話ではなかった。

「まあ、あまり興味が無い様だしこれと言って強制する気もないから。でも、気が変わったらいつでもここに来なさい」

言いつつ男はポケットから紙切れを取り出し、俺に渡す。

「これは？」

「その地図に載ってる場所に来れば、ガーディアンになれるって訳。俺はジツとその地図を見てから、制服のポケットにしまい目線を男に戻す。

「んで、あんたの名前は？」

「随分と友好的な口調になったよね、君。まあ、そうだな。俺ってイケメンお兄さんだし、名前知りなくなっちゃうよね、分かるよ」

「やっぱ俺には必要ない情報ですね、帰ります。」

俺が店の出口に向かうと男が音速のスピードで迫って来た。

「ちょっと待って！冗談だから……んで、俺の名前な？俺はクロキだ。君は？」

「……アキラって言います」

「ふむ、じゃアキラ。もし何かピンチになったら俺の名を呼んでくれよ！必ず助けに行」

「それじゃあ、さようなら」

後ろで「人の話くらい最後まで聞いてくれたっていいじゃないか！」とか聞こえるけど無視無視。

さっさと帰ってから夕飯の準備しなくちゃ。渚はさっき追加購入したハンバーガーを口いっぱい頬張っていた。なんかそのパンパンに膨らんだ頬を突きたいと思った。

…ホントに頬を突いて怒られたと言うのは余談だな。

帰りの途中。女の人の悲鳴がした。

「な、なんだ？」

「うう、耳が痛い…」

渚は耳を塞いで痛いと言うことを表現していた…のかは知らないが、とにかく悲鳴の出所を探る。

探ってるうちに裏路地が目に入った。…まさかな。

裏路地に入ると、女の人と腕が炎に包まれている男がいた。…さっき聞いたノラブレってヤツか！

おいおい、もう勘弁だよ。今日は一日中落ち着ける時間がなかった。それで終いにはノラブレの犯罪に巻き込まれるってのか？ デイスイズ デステニイー？ 知らん。俺の英語の成績知ってのかコラ。

「おい、ガキ。何見てんだ？ ああ！？」

お、こっちに気付いた。てかなんか俺が攻撃目標になってない？ え、マジで？

…いや、調度良い。ブレイザーって力でも使ってみますか。

ストレージにあるのは火のミスティックカーが3枚と電気のミスティックカーが4枚。電気は危険かな。

いろいろ思考を働かせて火のミスティックカーを右手に貼ってなぞる。あ、ちなみに俺両利きです。

「なんだ？ テメーもブレイザーか？ おもしれえ！ 殺り合おうぜ！」

えー何このセリフ。厨二病ですか？ 厨二病なんですか？ このヤロ！

とか思ってたら裏路地から出てきて俺の方に駆けだしてきた。あー
ーやっぱ無視して帰った方が良かったかな？

「仕方がねえなあ…ずっと見てた俺も悪い訳だし、相手してやんよ」
あれ？俺も厨二病移ったかな？まあいいや。俺も相手の方向に駆け
けだした。

炎と炎が交わりあった。

？『ガーディアン』

ドカンッ！という耳を劈くような音がしてから、既に五分が経過していた。

「はあ…はあ…。な、なんだよ…これ。意外と疲れんじゃないか…」
火のミスティッカーはエネルギーが切れて後一枚だけとなっていた。電気のミスティッカーに戦法を変えたいが、電気を上手く操る自信がない。下手をすれば、的を外し周りの人に感電してしまう。それだけは絶対避けたかった。

「おにいちゃん、手助けいる？」

渚が近づいてきそうだったから「大丈夫」と手で制した。そしてノラブレを見る。…明らかに俺と同じ、いや俺よりも体力を消耗している。

その時世界がグルンと回転した。

「おにいちゃん！」

渚の声が聞こえた。…頭が痛い…。ああ、頭を打ったのか。え？ああ世界が回転したんじゃないかと、俺が倒れたのか…。

見ると、俺の前に渚が立っていた。そしてノラブレの方に右手を翳していた。

「ダメ…だ、こんなところで…使うべきじゃない」

本当に声が出るのか分からなかった。ノラブレは倒れない。体力的消耗は俺より激しくてもそれなりにミスティッカーを使ってきた奴なのだろう。

「けど、おにいちゃんが傷つくのはもう見てられないよ…」

右手を下ろして俺を見る。俺、傷と言う傷は負っていないのだがなあ…。右手の甲をちよつと火傷したくらいだ。

「大…丈夫だから…」

疲れた体をどうにか起き上がった。が、すぐに地面に膝が着いてしまう。

「クソ…こんなことならガーディアンに入っちゃえば良かったかなあ…」
肩を呼吸に合わせて上下させながらなんとなくで呟いた。その時、上から人が降って来た。

シユタツという見事な着地。見ると、紺を基調とした服。白いズボン。飛び降りの余韻を受けてコートっぽい部分が摩く。

「よお、アキラ。ボロボロじゃないか」

「クロキ…テメ…」

強がって見せようとするが既に喋る力もない。

「ふ、大人しくしてろよ？このイケメンお兄さんが助けてあげるからな！」

くっそ〜。うぜ〜。

「さて、行くぜい。目え覚ませ『ネクロマンサー』」

言って髑髏のミスティッカーをなぞる。さつき俺の手に現れた黒の大剣が出現する。

ノラブレは急に目を見開いてクロキを見る。

「そ、それは黒の大剣『ネクロマンサー』…。てことはお前クロキ！？う、嘘だろう！？う、うわあああ！」

さつきまでの疲れは何所へやら。ノラブレは脱兎のごとく逃げ出した。クロキって有名なのか？

「すっごーい…」

渚が小声で短く感想を言う。…ちえっ、なんか気に食わないなあ。「それで？どうだい？ガーディアンに入る気にはなれたか？」

「ち、ちよつと、待って、死ぬ、疲れた、酸素、プリーズ」

おやおや、とクロキがニヤニヤしている。渚は苦笑。俺の弱さが改めて分かった気がした…。

なんとか酸素が体中を廻りちゃんと立てるまでに回復した。

「なあ、クロキ」

クロキは近くにあった大石に座っている。名前を呼ばれたことに

気付き、こつちを振り向く。

「なんだ？」

ホントは言いたくなかった。それでも、今回は渚にカッコわるい所を見られた。なにより、こんなことで力を使わせようとしてしまった。もう、そんなことがないように…

「ガーディアンに入れさせてくれ」

クロキはふう、と息を吐いてから笑顔で俺に右手を差し出す。

「これからはガーディアンとして、よろしくな」

右手を右手で繋いで絆…と言う程じゃないけど、それでも何か温かいモノを感じれた。

…ちなみに、この時渚はアイスクリームを頬張っていた。渚の胃は四次元か？と疑った。

？『思考』

時計が示す時間は夜の九時。飯を食い終わった俺は渚が風呂に入っている間に悩んでいた。

あの時は、ガーディアンになって力を得ようと思っていた。しかし、そうになると学業はどうなるのだろうか。

話によると明日学校が終わってからガーディアン支部に案内してくれるそうだ。

と、なると学校に通うのは明日で終わりになるかもしれない…。

「…悩んでも仕方ない、か」

ちよつと大きすぎるソファにうつ伏せで寝転がって呟く。

「うゝ暑かったゝ」

風呂上がりの渚が部屋に戻ってきたようだ。さて、と

「おい、髪…ちゃんと乾かせよ」

「えー！嫌だあ！」

「あ、オイ逃げんな！」

何故か渚は髪を乾かすのを嫌がる。普通女の子って髪の毛とか気にするもんじゃないのか？

そして、3周くらい部屋を周ってからなんとか渚を捕まえて両足を上手く使って逃げられないように固定。そのまま電気のみスチーマーを貼ったドライヤーで髪を乾かす。

渚は「うー」と唸りながら観念したように抗うのを止める。ちなみに、今渚はバスタオル一枚の状態です。逃げないように腹に回している両脚が何故か震えます。いいえ、決してロリコンではありません。断じて、ロリコンでは、ありません。十歳くらいの女の子を捕まえて興奮するほど俺は腐ってません。

てか、髪の毛長すぎて乾かすのも大変なんだよ。腰まであるぞ。でも銀に輝く髪は綺麗だと思ってしまう。

そして、その髪に負けないくらい強く、淡く、それでいて深い碧

い眼をした少女はどれだけの苦しみを背負っていたのだろうか…。

「おら、終わり」

数分してから渚を解放してやる。

「もう、逃げないって言ってるのに捕まえっぱなしにするんだもん…」

「離れたらお前、絶対逃げるだろ」

未だに渚はブーイングをしてくる。…何故かこんな時間でもいいから長く続いてほしい、と思ってしまう。

…やはり、俺は渚と「あいつ」を重ねているのだろうか。俺はもうあんな後悔をしたくないと思っっているのは確かなのだが…。渚の世話を焼いて「あいつ」との時間を取り戻そうとしているのだろうか。

自分でも分からない。分からない。分からない…。

『テスト』

学校では既に二時限目。もうすぐ午前十時になる。なんだかまだ十時なのに疲れた。小説読みすぎたかな…。

ドカン！

校庭から昨日聞いたような耳を劈く音。教室では何事か、と窓の外を見ると…うお！？

なんか、校庭の真ん中に大きなクレーターが出来ている。

「えー！学校の皆さん！おはよーございますー！ちよつと迷惑掛けますけど大目に見てねー！」

誰だか分からないけど、クロキではないことは確かな女の子の声。拡声器とかマイクを使ったのかキイイイイイン！と嫌な音が出ている。

教師は「体育館に逃げてください！」と、避難を促す。

外を見ていると、なんだかぞろぞろと多人数の人が出てきた。良く見ると腕にミスティッカーを貼っている。ふふ、これでも視力は良い方なのだ。

…とか言ってる場合じゃねえな、これは。

ブレイザーだ。多分、ノラブレだろう。…だが、あそこまでまとまって何をする気なのか、俺には理解出来なかった。

「とりあえず、俺も逃げるか…」

「ふぎゃー！」

廊下を走ってる時、何かを踏んでしまいバナナの皮を踏んだか如く綺麗にすっ転んだ。

何を踏んだのか、と見てみるとミスティッカーだった。しかし、これまでに見たことがないモノだった。

二匹の竜がイラストだ。一匹は紅い竜。もう一匹は黒い竜。その

二匹が鎖で繋がってる。そんな感じのイラスト。
もしかしたら、ネクロマンサーみたいな奴かもしれない。そう思
いポケットに入れて廊下を力いっぱい走り出す。

「おい、遅かったじゃねえか彬。ていうかあいつら、こんなところ
で何やってんだ？」

直人は落ち着いた口調で言っていた。何故か、あいつらを知って
るかの様な冷静さ。

「とりあえず、お前が無事で良かったぜ、直人。お前には後で相談
したいことがあったからさ」

「ほほう、そりゃ興味あるな。お前が俺に相談なんか珍しいし。

…ん？どした？」

俺は立ちあがる。力を欲しいと願った。あいつのために。

「彬君。何をしていますのですか。座っていなさい」
教師に止められるのも構わずに駆けだす。

「すみません、トイレです」

これだけを言い残して。

『テスト?』

既に校内に入っているブレイザー共に見つからないようにトイレを指す。

実は、本当に漏れそうなのだ。今さっき、体育館のあまりの寒さに腹を痛めたのだ。

そして、なんとかお手洗いに到着。

「ふう、間に合ったあ」

大の方だから漏れたら小よりも恥ずかしさ倍増だからな、うん。
鍵を閉めズボンを下ろす。

ベルトを締め、ドアを開けた時だった。

「あ」

「あ」

「あ」

綺麗な「あ」の合唱ができていた。

「あ、どうも、連れションですか?」

とりあえず、笑いながら場を和ませようとする。

「ああ!?!」

失敗。脱兎の如く逃げ出す。あ、手洗ってない…。教室の前に水道があつたはずだし、そこで洗えばいいか。

ふう、と一息。ポケットに手を突っ込みミスティッカーを取り出す。ストレージは教室だ。火のミスティッカーはいつもあそこの中に入れてある。さてこの場合、この得体のしれないミスティッカーを使うしか道はないのだろうか…。その時、体育館の方で大きな悲鳴が聞こえた。…っち、行くしかないか。

バン！というでかい音をたてながら体育館に入る。やはり、ノラブレが一般生徒を襲っていた。

：いや、性的な意味じゃないからね。普通に物理的に怖い方ね。そりゃあ、性的な方も怖いけどさ。

ちなみに、今のでかい音の所為で生徒とかブレイザー共の目線を注目しちゃったよ俺、どうしょ。

「クソ！こうなったら儘だ。ミスティッカー…頼むぜ」

襲われてる中には俺の同級生で結構仲が良い方の女子とかもいた。直人は何故か高みの見物。体育館にある舞台上に上る階段で腰を掛けて静観していたらしい。

そんなこんなで状況把握しながらミスティッカーをなぞる。出てきたのは…二丁拳銃？

右手には紅い銃。唯一黒のグリップには業火のエンブレム。マガジンは入っているようだ。だが、実弾が出てくるかどうかは知らない。

左手には黒い銃。同じく黒のグリップに紅の髑髏のエンブレム。同じようにマガジンは入っていて同じく実弾が出てくるかどうかは謎だ。

とりあえずで、ガアンツ！とノラブレの方に向けて一発撃ってみる。反動はそれなりにある様だが、実銃ほどではないと思われる。音は銃そのものだったが。薬莢も出てきた。：え？てことは実弾？

「熱ちちち！」

いや、出てきたのは炎だ。黒の方を撃ってみる。こっちは…なんか実弾っぽい感じ。撃ってて良い気分にはなれない。しかし、銃に關しては不慣れな俺が使うにしては命中率はなかなかだ。生徒に当たるかもしれないという恐怖があるが、しかし、その恐怖さえも消してしまうような命中率なのだ。

：まあミスティッカーだからなんだろうなあ。

「きゃあああ！」

女子生徒の悲鳴に忘れていた恐怖が蘇る。もしかして…当たった？
しかし、当たったのではなかったらしい。ノラブレに捕まったのだ。それも三人に抑えられて。しかも、捕まっていたのは俺のクラスで最も外見が病弱で非力そうなことで有名な『佐伯 彩』だった。忘れた恐怖の代わりに　ブチッと何かが切れる音がした。

『結果』

彩を捕まえた奴らに標準を合わせようとするが、彩に当たってしまいそうに恐怖に陥る。

「はあ…はあ…はあ…」

あまりの緊張に息が上がる。しかし、なかなか撃てない…。そんな自分に苛々して銃を捨てた。

「うらあああああああつ！」

相手三人を殴りに掛かる。

彩の右腕を抑えてる男の顔面に一発デカイのを食らわせ、後の二人を睨む。

「ア、あへ…」

世にも情けない悲鳴を上げた男に追い打ち。

「テメーら、男じゃねえよ…弱い女狙いやがってよ…っ！」

飛びかかるうとしたその時、

「はい、そこまでえ！」

やる気が削がれる様な声が出た。さっきの教室で聞いた女の子の声だ。しかし、渚とは違ってのんびりとした口調だった。

「いやあ、クロキに聞いてた以上の結果だよお！うん、合格。女の子守ろうとした所なんて数値が百超えてたし」

俺は殆ど放心状態。呆気にとられてポカーンとしていた。

「はい、教室戻って、今のは避難訓練だから」

と教師が言うのと生徒たちは「なんだ訓練か」「ビビった」と暢気なことを言いながら教室に戻っていく。

「えつとお…はい？」

未だに状況を掴めずにいる俺の前にいつの間にか女の子の声の主が立っていた。

金髪でツインテール。ロリっ娘体形…ていうかロリっ娘だろう、これ。

「む？今私のこと子供、とか思いましたね？私はこれでも二十歳なので間違えないように！」

「えええ！？二十歳！？」

ぐるぐる回って白衣を翻しながら満足そうに「ふっふっふ」などと笑っている。

「支部長？！何やってんすか！こんな所で…、しかも彬まで！お前ブレイザーだったのか？！」

「凄じじゃないかアキラ！まさかあそこまでミスティッカーを扱えるなんて…お兄さん感心したよ」

そう言って走って来たのは…直人とクロキだった。

『ガーディアン エンジェル支部』

『エンジェル支部』

なかなか綺麗な部屋。真っ白で清潔感漂う良い部屋だ。

此処こそが、これから俺が務める仕事場となるわけか…。…学生でもきちんとした仕事をすればそれなりの金が貰えるそうだ。

部屋の中央。真っ白なテーブルと共に用意された椅子に背を預けながら考え事をしていた。

実はまだ結構悩んでいた。学業はどうなるのだろうか、とか。ここに入ることが逆に渚を危険にするんじゃないか、とか。それでも、俺は…。

「この選択肢で正解…だよな」

「ん、なんか言った？」

無意識のうちに独り言を口走っていた俺の顔を渚が至近距離で覗いてきた。

「何でもねえ。独り言だ」

「ふうん。ま、いいけどさ」

渚は今日も絶好調の様で機嫌がよさそうにコーラを飲んでいた。

…こつちの苦労も知らないで暢気な奴。とか思ったけど、俺が勝手に悩んでるだけだしなあ。

ガーディアンは来年、本格的な行動を起こすらしい。今は研究段階だから、ミスティッカーをあまり好き勝手使う訳にはいかないのだそうだ。ノラブレが犯罪を起こした時もあるべくミスティッカーは身体に貼らずに対処してほしい、とのことだった。

更に言うところバトルルームという訓練場所もあるそうで、そこなら身体にミスティッカーを貼っていいそうだ。エンジェル支部の部屋はかなり広い。「どれだけ暴れまわっても壊れない丈夫な壁で守られているからドンドン暴れちゃってえ！」と、支部長の「遠間 香里」は言った。

「お、いたいた。なんだ？真剣そんな顔しちゃって」

直人だった。いつものヘラヘラした顔で俺に近寄ってくる。近寄って、近寄って…

「ちけーよ！」

気付けば、さっきの渚との距離よりも近い所に直人の顔があった。

「なはは、冗談冗談。んで、どうしたのさ。やっぱ不安か？」

「あのなあ…どうしたのさ、じゃねえんだよ。お前がブレイザーなんて聞いてねえぞ！」

「そりゃ、言ってるねえもん。大体、ガーディアンは一般的には情報伏せなくちゃいけない決まりだし。情報漏れる可能性あるしな」

直人は自動販売機からコーヒーを買ってから俺の向い合せの席に座った。

「そもそも、情報漏れても何にもならないか？」

「それがそうもいかないんだよ。ガーディアンと対立する組織が既にあるんだよ。しかもノラブレの集まりだ」

「ふ〜ん…って、既にガーディアンっていう存在はばれてんだな…」

「…それは言わない約束だぜ」

…いいのか！？これでいいのか、ガーディアン！

渚はいつの間にか飲み終わっていたコーラを捨てて、つまらなそうに「うー…」と唸っていた。

『炎銃・暗銃の謎』

「あ、ここにいたのか。アキラ君、今日はもう帰って良いよ。って言いたいところだけど一応もう一回力を見せてもらいたいから、さっきのミスティッカー持ってバトルルームに来てくれるかな？」
直人と渚とで話をしているときに支部長の力オリに呼び出しをくらう。

ガーディアンのアジトは地下にある。更に地下に行くと、バトルルームがある。

臭い。無機質に囲まれたこの部屋は広い代わりに鉄の臭いがキツイ。

「さて、それじゃあ、ミスティッカードライブしてみて」

ミスティッカードライブ、即ち、身体にミスティッカーを貼ってなぞるということだ。

ストレージから今日拾った武器系ミスティッカーを出す。そしてブレイザードライブ。

今日見た紅い銃と黒い銃が出てきた。

「ふむ・・・、そのミスティッカーはこれまでに例がないね。光と火のミスティッカーが融合してる」

「え？そんなミスティッカーなんてあり得るんですか？」

「実質あり得ないことだと思うよ。でも、力の流れを見ると融合していると思えないの」

サングラスのを付けたカオリが言う。

そのサングラスで力の流れとか言うのを見るのだろうか。ここには謎がいっぱいだ。

「さて、じゃあそのミスティッカーに火のミスティッカーを重ねて

みて」

「え？重ねる？」

「そう、同じ属性のミスティッカーを重ねて力を増加させることができるんだよ。…そのミスティッカーは異例だから反応がどうなるか試すっていう感じだけど」

俺は実験体なのか？これでミスティッカーが狂って俺死んじやつたら嫌なんだが…。

「それで、まずは火のミスティッカーを貼ってみて。」

仕方なく、火のミスティッカーを重ねてかなぞる。すると、紅い銃の業火のエンブレムを炎が包んだ。

「うお？！なんだこりゃ」

「うむ…、火のミスティッカーを貼ると紅い銃が反応して光のミスティッカーを貼ると黒い銃が反応するって感じかもねえ。一応ってことで光のミスティッカーも貼ってみてくれるう？」

頷いてから光のミスティッカーを貼り、なぞる。すると髑髏のエンブレムが黒く燃える。

「あれ？光らないのか？」

「光のミスティッカーは闇属性のものが多かったりするんだよお。多分そのミスティッカーも例外じゃないんだね」

うむ、光なのに闇とはこれ如何に…。

「あ、今日はもう帰って良いよ。来週の木曜日、午後になったら来てね。いろいろ試したいことあるから」

笑顔でカオリは言った。

「…夜までには終わりますよね？」

「ん？うん多分だけど…なんで？あ、クリスマスだから？」

そうだ、明日はクリスマス。今から直人に相談するつもりだった。

「あいつ」にできなかったことの一つ。『クリスマスパーティー』だ。

『妹』

『エンジェル支部』地下アジトから帰ろうと言う時。渚に先に帰ってもらい、俺は直人に相談を持ちかけた。

直人は最初、「お前が相談!？」等と驚いていたが、俺の相談内容を聞いた直後は「お前も大人になったなあ、うん。お父さん嬉しいよ」とのことだった。突っ込みどころが満載すぎる。

相談内容は、『クリスマスパーティーを開催して渚を楽しませてやりたい』であった。

この内容のどこに「大人になった」と言われる成分があるのか俺にはまったく理解できなかった。

まあ、そんなことはどうでもいい。その相談に対する直人の解答は「楽しいなら断然人数多い方がいいだろうな。明日ガーディアン支部の皆が揃うからその時全員紹介するっばいし、支部の皆でパーティーってのも悪くないかもな」というものだった。

パーティーの用意は後日俺と一緒に用意すると直人は言い、その後支部長に用があるとのこと足早に去ってしまった。

そんなこんなで、渚の事を考えながら歩く帰り道。コンビニで肉まんを四個買ってから俺の家に向かった。

玄関に入ると、違和感があった。あるはずの小さな渚の靴がない。

「渚……?」

部屋に入るとやはり電気は付いていない。電気を付けたが、これと言って変わったモノはなかった。

一応で俺の部屋や、浴室等も確認したがやはりどこにも渚はいなかった。

無意識のうちに駆け足で玄関を飛び出し、渚を探し回った。

どこまで行っても渚は見つからず、遂に立つことも辛いくらいに体力を消耗してしまった。

俺は情けなく地面に四つん這いの体勢になってしまふ。

もしまたあの髑髏集団に捕まってしまったら、という嫌な想像が脳内に広がる。

「…これは俺の所為か…。渚を先に帰らせてしまったから、なのかな？」

ただただ、後悔を呟く。口に出していないと俺の中で後悔が爆発してしまいそうだったから。

「……………」

どこかで声が聞こえた気がした。幻聴のように聞こえてくる。「おにいちゃん！」というユキの声…。俺の妹の…声。

『ユキ』という名前の通り、近づくと俺の体温で『雪』の様に溶けて消えてしまいそうな、それでも太陽の様な笑顔を見せてくれていた。

俺はユキと距離を置いた。何故かは分からない。でも、それでも笑顔を見せてくれたユキにいろいろなことをしてやりたかった。原因不明、詳細不明の病気になって死ぬ直前まで雪とは正反対の太陽の様な笑顔を見せてくれていた妹に。でも、もう何もできない。

俺は、渚の世話を焼くことでその償いになると思っっているのだろうか。

「おにいちゃん！」

いつも、そう呼んでくれる渚とユキを…重ねているのだろうか。

「ねえ、おにいちゃんってば！」

「え、え？あれ？ユ、ユキ？」

いつの間にか俺の目の前にユキが立っていた。…いや、渚だった。渚とユキは全然違うのに、なんで間違っただろうか。黒髪のロン

グと、銀髪のロング。ユキの眼は俺と同じで赤で、渚は碧。全然違うのに…。

渚は眉を八の字にして俺の激しい息と連動して上下する背中に手をそっと宥める様に置いてくれている。

「おにいちゃん…ごめんね。なんか迷惑掛けちゃったみたいで…」

渚は申し訳なさそうに目を伏せる。

「…迷惑なら、いつも、掛かっているけどな…」

冗談で言っただつもりだったが、渚の顔は余計に下を向いてしまう。

「冗談だから。そう暗くなるなよ」

背中に置いてある手をそっと払ってからよろめきながらも立ち上がって渚の頭に手をぽんと置いてやる。

「…さて、帰ったら肉まん食いながら、お仕置きタイムな」

「肉まんあるの？ やった！ …でもお仕置きは嫌だなあ…」

本当に嫌そうな表情になったりする、裏表がなさそうな渚に何故か抱きしめたいくらいの愛おしさがあったのは何故だろうか…。ああいいや。俺もうロリコンなんだ。シスコンなんだな、うん。

『俺の過去』

二〇四二年、二月二十三日。埼玉県川越市。

病院独特のにおい。あるいは、保健室のにおいか。無機質なピ、ピ、ピと規則正しい音が響く部屋。

俺の妹、ユキは太陽の様な笑顔のまま………息をしないモノになった。息をしなくなった人間は人間ではなく物に成り下がる、どこかで聞いたことがあるがまさにその通りだった。動かなくなつた俺の妹は雪なんかよりもずっと冷たく鉄のようで、表情も変わるこゝとがない。勿論、ユキ自らの意思で身体が動くことはもうない。

俺はこれまでにないくらい強くユキの手を掴み、俺の妹の名を……ユキと言う名を呼び続けた。もう人間ではないから、ユキの手を掴むことができたのかもかもしれない……。

そんな自分が嫌で嫌で仕方なかった。何故もつと親しく接してやらなかったのだろうか。そんな思いが心を支配してただ嗚咽を漏らす。

なぜ、ユキと親しくしなかったのかは自分でも分からない。

分かるのは、名前の通り「雪」の様で俺が近づくと溶けて消えてしまう。そんな思い込みがあったこと。そんなくだらない思い込みで俺はこれまでユキと接することを避けていたのだ。

俺はこの17年で神に二度お願いをした。一度目はユキを殺さなideくれ、連れていかないでほしい、というモノだった。しかし、神は俺の願いを叶えずユキは死んでしまった。

二度目のお願いは、ユキが死んでから数日後。せめてユキの様な存在を俺に恵んでください。今度こそ後悔しないくらい優しく接してやりたい。しかし、これも願わないのだろうかと思つた。

その一年後、研究施設の町『EFT』に一人で引越した。ここでは最初に直人が友達となり、他にもいろいろ友達ができた。こ

ここに来て尚、ユキが死んだことを悔やんで暗くなっていた俺にはとても眩しい日々だった。

そして、そんな日々が過ぎて行きユキが死んだことを思い出すことも少なくなってきた引越して二年目の十二月。渚と出会った。

渚とユキの笑顔はどこか似ていて、「おにいちゃん」と言われるとユキの姿が記憶の中で浮かんで来て何故かニヤけてしまう俺がいた。

『碧眼のドラゴン』

「そんで？お前は何所に行ってたんだ？」

肉まんをご機嫌そうに食べてる所申し訳ない、と心の中でだけ言っておく。

渚は「うっ」と喉を詰まらせた。ペットボトル天然水を飲んでから肩を竦めながら語る。

「何所に行ってたって言われるとちよつと困るんだけど…ね。ちよつとこの子を探してたんだよ」

そう言っただけで渚は何所に隠れていたのか小さな白いドラゴンを猫の様に抱きかかえた。

「……………は！？」

「え…？なにそれ、おもちゃ？電池でも探してたの？」

「ち、違うよお…。ちゃんと生きてるんだよ！サラちゃんって名前のホワイトドラゴン」

渚がこれまた猫の様にそのドラゴンを俺の方に差し出す。

「ガウ！」

吠えた。いや、鳴いた？表現に困る。ていうかホントに生きてんのかよ。もういろいろ慣れてきたけどドラゴンってどうよ…。

そんなこと考えながらドラゴンのサラちゃんをじーっと見てたら、そのサラちゃんの口がガパツと開いた。…ん？

「ガア！！」

「おわちゃちゃちゃ！！」

「ああ！おにいちゃん!？」

吐いた。ドラゴンが俺の顔面向かって炎を吐きやがった。遠のく意識の中不思議とその炎は何故か心地良かった。

俺の目が覚めたのは俺の部屋にあるベッドの上だった。久しぶり

の寝心地の良さにもう一回寝てしまおうかと思ったが、止めて上体を持ち上げる。

「あ、おにいちゃん！…大丈夫だった？」

隣に俺の勉強机にセットとして付いてきた椅子をベットの隣に持ってきて座った渚が心配そうな顔をしていた。

サラは渚の膝の上で身体を丸めて寝ていた。

「一応大丈夫だ。でも、不思議だな。最初は熱かったけどその後はなんか心地よかったし…。今も火傷とかないみたいだし…」

「ああ、それはこの子の能力なんだよ」

「能力？」

渚がいつもするように小首を傾げてみたが多分可愛くなかっただろう。逆に気色が悪かったかもしれない。

「そう、能力。疲れた人を癒す能力なんだけど、一定以上疲れた人は寝ちゃうんだよ」

そいつは良い能力だな、と言おうしたら渚の顔がちよつと暗くなってしまった。

「おにいちゃん、疲れてたんだね…。ごめんね、迷惑ばかりかけて」
渚は多分、さっきのことを気にしていたのだろう。渚が自分勝手に出かけたりにして迷惑を掛けた。俺が立てなくなるまで探していたことを気にかけているのだろう。

俺はニツと笑ってから渚の頭をクシャクシャする様な豪快さで撫でてやる。

その行動が予想外だったらしく、渚は目を丸くして驚いていた。

「確かに、最近は迷惑ばかりだし、疲れまくってる。でも、いいんだよ。俺が…」

そこで一度言葉に詰まる。俺はなんと言おうとしたのだろうか。思い出せない。

「…俺が後悔したくないだけだから」

言わなくていいことを言ってしまったかもしれない。だがそれ以外、なんて答えたら良いのか分からなかった。その俺の発言を気に

しないでくれ、と念じたが

「後悔…？」

案の定。渚は疑問を持ってしまった。

「…何でもない。それより、今何時だ？うわ、もうこんな時間か。お前の飯作らないとな」

笑顔でそう言ってあげた。

だが、渚は首を振って優しい顔で言ってくれる。

「私は夜ご飯いらないよ。おにいちゃん、今日疲れてるんでしょ？なら、今日はここで寝てて」

その顔はなんだか、母親の様な温かさを含めていた…。ついでに言うと、ベットからはいい匂いがした。

目が覚めるとふかふかしたベッドの上だった。

まだ意識がはつきりしない中で、どこかで嗅いだ事がある様な花の様ないい匂いがした気がした。

…？何かがある？

意識がはつきりしてくると、何かを抱いている感覚が腕にあった。抱き枕なんか持ってたかなあと思いまだ眠い目を薄く開けて…驚愕する。

「な、渚…?!」

渚が昨日の服のまま、俺の腕に包まれて静かに一定間隔で、すう、すう、と寝息をしながら寝ていた。

なんとなくて渚の顔を見つめてしまう。瞼は閉じているが渚の眼は今も変わらず淡く深い碧色をしていることだろう。ちょっとだけ隙間が開いてる口からは先程から変わらず一定の間隔で息が漏れている。輪郭は触れれば消えてしまいそうなほど細く、唇は相変わらず薔薇としか表現できないほど美しかった。腰まで伸びた長い髪も相変わらずだ。銀髪の間人は生きてきた中で何回か見たことがあるが、渚ほど美しい銀髪は見たことがない。風呂には入っていないのだろうけど、汗臭いという訳でもなくただいい匂いばかりが空間を支配していた。俺の臭いなんか微塵もしないほどに。

「俺は何見惚れてんだよ……」

遂、じーっと渚を見てしまったことに対し羞恥心が生まれる。

そして、今気づいた。どこかで嗅いだ事があると思ったらこのベットの匂いだ。昨日の晩、俺に程良い眠気を誘ってくれた匂い。と、いうことは俺のベッドはもう渚にマーキングされた様なものなのか…？

そんなことはもういい。…いや、実は良くない。この状況はちょっと嬉しい。…さすがに自重しよう。このままではホントにロリコ

ンになつてしまう。

「渚起きる。今日は出かけるんだから起きろー」

身体を揺すりながら言うと、渚は「あと一時間だけえ」と定番っぽいことを言いながらまた深い眠りに落ちていったらしい。止める、このままでは俺が社会的抹殺されかねない。主にロリコンから攻撃される！というか、一時間って長いなオイ。せめて三分とか五分とかさあ…。

その後、渚は眠い目を擦りながら起きてくれた。猫のように手の甲で顔を擦るのが渚の朝起きた時の癖らしい。こういうちょっとした発見が嬉しかったり楽しかったりする。

朝ごはんを食べながらあのドラゴンのサラちゃんのことについて聞いてみた。その答えは次の様なものだった。

「サラちゃんとは私が『組織』に連れて行かれる前からの友達だったんだよ。捕まってるから定期的な会いに来てくれてね。あ、監獄の中でもかなり高い所だけどちょっとだけ隙間があるの。そこから小さい体を活かして私に会いに来てくれたんだよ。だから…親よりも心許せる存在かもしれない。だからって親には心許せないって訳じゃないからね？親もちゃんと合法的に会いに来てくれたし」

なんだか触れていい話だったのかどうか、掴めない話だった。渚は笑顔だけど、ホントは悲しい記憶を呼び起こしてしまったのではないだろうかという不安に駆られる。

サラはそんな話を知ってか知らずか渚の膝の上で「ガルルル」と小さく唸っている。

渚曰く、「ガルルル」というのは安心してたり気持ちがいい時な

のだという。

渚の膝は安心できるのか。それとも居心地がいいのか……。い、いや。試してみようかなあ、とか思ってるわけじゃ……。うん。いよいよホントにロリコンになったのかな、俺。

『私の過去』

暗い、暗い。何も見えない。小さな光だけが指し込む、殺風景な部屋。親が持つてきてくれた服に着替えて質素なベツトと言えるかどうかギリギリな布の中に身を纏う。

寒くて凍え死にそうだった。その時、小さな翼が羽ばたく音と共に来てくれた。私の友達。「ガウ！」っていつもの挨拶をして私の傍に降り立つ。

「おいで…、サラちゃん」

サラちゃんは私の声を聞くと、待つてましたとばかりに私の布団の中に入ってくる。さっきまでの寒さをサラちゃんが温めてくれるふと思いついた。あの高い場所にある隙間から出られるかもしれない、ということ。

サラちゃんの力は私の血で封印してある。解放の権利は当然私にある。どうすれば解放できるかは覚えていないけど…。サラちゃんは、私がまだ3歳の時に崖から落ちた私を助けてくれた恩人…恩獣かな。

「サラちゃん。力を解放すれば確か成獣の大きさになれるんだよね？」

「ガウ？」

サラちゃんの年齢は実際の知らないけど、既に三十歳は超えていたはず。そこまで育てばもう成獣として生きていけるくらいの大きさになっている。私の知識が正しければ…。だけど。そもそも五年前から知識として入ってくるのは文字や、言葉だけ。五年前の知識が正しいかなんて分からない。当たって砕ける、だ。封印の仕方は覚えてる。後は解放を思い出せば…。その時、いつもの男が入ってきた。

「おい、ガキ。生きてるか？」

女神の生まれ変わりとか言っときながらその口調はくない？とか

思ってる辺り私はまだまだ余裕なのだろうか…。

「生きてるのなら出てこい。今から実験の再開だ」

私は多分凄く嫌そうな顔をしたのだろう。実験、というのはかなり苦しく何より痛い。だから嫌だった。

「早くしろ！殺すぞ！？」

男はかなり苛々しているらしく私を罵倒してくる。仕方なく行くことを決心して、布団を出す。

「サラちゃん。また来てね」

バイバイと手を振ってから部屋を出ようとした、その時。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ガンガラガラガシヤンという感じに壁が崩壊する音と共にサラちゃん全てを壊す様な猛々しさで吠えた。

吃驚して後ろを見ると、碧い眼をした大きな聖獣がいた。聖紋が覆う大きな翼で部屋を壊す。

瞬間、突然の浮遊感に苛まれる。サラちゃんが私の服を啜えて飛んでいるのだと気づくまで数秒掛かった。

その後、サラちゃんは私の家の前で私を降ろした。

封印として私の指を家の前にあつたナイフでちよつと切つて少量の血を流しサラちゃんの大きな口に流して込んでから、私がサラちゃんの主であることを証明する首輪に軽くキスをする。すると、いつも通りの小さなサラちゃんが「ガウ！」と吠えながら私を見つめていた。

「…ごめんね、サラちゃん。ここでお別れだよ」

私が脱走したことで組織内はすぐに私の家族の所に行くはずだ。

家にも捕まるのならいつそ遠くの世界に逃げよう。そう決めた。

私を知ってる中で一番遠くて影が薄い世界は…、地球の日本。

テレポーターは村の北側にあつたはずだ。日本にテレポーターはないからもう戻れないかもしれない…。それでも、逃げなくちゃ。サラちゃんくれたチャンスなんだもん。

苦労してテレポーターに到着。「テレポート、地球・日本」と行き先を小さな声で呟く。私を青白い光が包んで違う世界へと私を連れて行ってくれた。

あの時の監獄よりは明るい、けど、それでも暗くなった部屋でそんな遂数日前のことを男の寝顔を見つめながら思い出していた。

おにいちゃん…今日は迷惑掛けちゃったなあ。後で何かお礼をしなくちゃ。

…ふわあゝ、なんだか私も眠くなってきたな。時計を見ると、既に時刻は十一時。

でもベットはおにいちゃんに貸してるし…逆か。いつも私が借りてた訳だし。

もう、いいや。おにいちゃんには悪いけど一緒に寝ちゃおっと。

おにいちゃんが調度寝がえりをうってスペースが空いたのでそこに身体を滑り込ませる。

ふかふかしたベットはすぐに私を深い眠りへと誘ってくれた。

『自己紹介』

時計が午前九時を示す頃、俺と渚はエンジェル支部で他のガーディアン達に自己紹介していた。

「どうも、高木 彬です。髪は地毛。眼も紅いけどカラーコンタクトとかじゃなく生まれつきですので。歳は十七歳っす」

面白いことを言える様な人間じゃないから、こんな自己紹介になるんだろっなあ。

「どうも！渚っす！銀髪なのは地毛です！そんでこれがサラちゃん！私の友達です！」

「ガウ！」

元気がいいのはなによりだが、声がでけえよ。そして口調が変わってる。サラは火を吐くな。てかサラまで紹介すんのかよ。皆ビビってるよ…。

「よし、じゃあ次はガーディアンの皆の紹介ねえ〜」

相変わらずのんびりした口調でやる気を削ぐ能力発動中の支部長に薦められ、一番右に立ってた男が自己紹介を始める。

「俺はカズマ。特徴がないのが特徴って感じなキャラだ。歳は十九だ。よろしく」

確かに特徴がない。だけど…良く見ればちよつと長く、眼を前髪で隠すような髪は紺色艶やか。眼は金色。特徴ありまくりだよ。声がちよつと高めなのも特徴かもしれない。背は俺より高い。一八〇センチメートルくらいあると思われる。

カズマから右手を差し出されたので俺の右手でその手を握る。

「まったく、相変わらずだね…。あんたの場合、毎日自分の顔を鏡で見ることをおススメするわ」

右から二番目のショートヘアで背が低めの女が前に出てくる。

「私の名前はアキ。私の髪はさすがに染めてるけど…。歳は十七。アキラ君と同じね。まあ、これからよろしくね」

ピンク色の髪の毛を指で弄りながら笑顔。カズマと同じように右手を差し出してくる。俺にじゃなくて渚に。

「渚ちゃん…だよな？かわいいなあああもっ！」

渚がアキの手を握る前にアキは両手を渚の背に回し抱きつきながらキヤッキヤと騒いでいる。渚は二三センチメートルくらいだからアキは一四五センチメートルくらいか？低いなあ。…女の子っていいよね。女の子に躊躇なく抱きつけるって、いいよね。まあそんな俺も朝ベツトの上で渚を抱いてる形で寝ていたのだが…それは無意識だから女の子を抱いた数にカウントしないでおくことにする。

「アキさんも相変わらずですよ。背が低くて可愛い女の子には見境なく抱きつく所とか」

茶髪の髪を碧い龍の模様を付けたバンダナで覆っている背が低い男が前が出る。

「な、なによお。わるい？」

「いいえ全然。まあ、その性格のおかげでエンジェル支部に来たわけですし」

…ん？ああ、なるほど。支部長も二十歳とは言え十分背が低くてかわいい女の子という訳か。

「ふん、別に私のことはいいいから早くアンタもこれまでに起こした事故の紹介でもしたら？」

「…僕、事故起こしたことないですけど。まあいいか。僕はシユウジって言います。年齢は十四歳です。これからよろしくお願ひします」

敬語で背は一五〇センチメートルくらい。俺よりは低いようだが、女性陣よりは背が高い。青で統一したシンプルな服の所為かあまり強い印象は受けない。

「んじゃ、最後は俺だな！アキラはとっくの昔から知ってるけど渚ちゃんは知らないわけだし」

直人が右拳を左手の掌に打ちつける。やる気があんのは分かるけど…ねえ？

「俺の名前はナオトだ。年齢はアキラと同じで一七。特徴は幼女好きだ！」

直人がアキが抱いていた渚を無理矢理に抱きつこうとする。渚は驚いた猫の様な仕草で逃げ回っている。

「ち、ちよつと！私の仔猫ちゃん返してよお！」

まあ表現は間違っていない。渚の一つひとつの仕草はまさに猫だからな。

「直人君、ダメだよ。アキちゃんも、女の子のお尻追い回したら。変態っぽいから」

支部長が教師の様な表情とセリフ（？）で場を鎮める。支部長力オリは渚とは違う美しさを醸し出すその颯爽とした姿は例えるなら恐れを知らぬ背が低くて爽やかな大型犬の様だ。…例えがおかしい背が低い大型犬ってなんだよ。

「さて、今日は休みだった訳だしもう解散していいよお。今日呼び出したのは自己紹介の為だけだからあ」

その解散、という言葉がどれだけ待ち遠しかったか。今日は渚とある所に連れて行こうと決めていたのだ。

直人やその他ガーディアン支部の仲間たちに軽くお辞儀をしてから渚と共に支部の出口を目指した。

『買い物』

今日は渚の希望で買い物をする事となった。はつきり言っしまえばデートの様な空気なのだが…実質どうあれ周りからは兄妹にしか見られることはないだろう。

今日は町でここを利用したことがない人はいないと思われる程の巨大デパート。いつ来ても混んでいる故に入るのを拒んでしまいがちだが、渚の希望なのだ。拒否するわけにはいかないじゃないか。希望した渚は物珍しそうに店内を見回している。

渚の住んでいた所は村だと聞いた。それこそこんなに人がいるのは珍しいのだろう。ただでさえ、監獄に閉じ込められていたのだから…。いや、もうこの話はいい。シリアル感丸出しの重い空気は引っ込んでろ。

「ねえ、おにいちゃん。凄いよ！人がこんなにいっぱいだよ！」
そんな興奮気味の渚を手で「まあまあ」と落ち着くよう促す。

「今日はお前が欲しい物買いに来たんだぞ。人の多さに驚いてたんじゃ今日一日心臓がもたねえよ」

そう言つと、渚はその淡く深いサファイヤの瞳を一層輝かせた。

今日は俺が仕方なく荷物持ち。とりあえずで服を買うこととなり、渚はかなりの数の服を買いこんだ。こいつ加減を知らねえ。俺学生で親の仕送りだけで生活してるのに…。

まあ、そんなこと言ってもかなりケチって生活してきたから貯金はかなり貯まっているのだけど。

衣類品が揃っている店に来た時の渚の反応と言ったらそれは凄かった。「ここは天国か！」と叫びそうな程瞳を輝かせ店内のあらゆる物を物色し出したのだ。

そういう場面やはり渚は女の子なのだ、と思ってしまう。服

を見て目を輝かせるところなんておしゃれに敏感な女の子そのものだ。

そして服は部屋着や出かけるとき用に五着。寝巻を三着の合計八着を買った。お出かけ用の服は渚が来てくれるのが楽しみなくらいに可愛いものだった。…自重しようぜ、俺。

次に行った場所はアクセサリーが大量に売っているアクセサリー専門店だった。

しかし、渚は何を買おうともせずにじーっと見ているだけだった。俺の推測が正しければ、渚もちゃんと人の子。意外と高いアクセサリーばかりでさすがに俺に「買って」と頼めなかったのかもしれない。

そんな中で渚が最も見ていたアクセサリーは小さなサファイヤが中央についているネックレスだった。…仕方がないなあ。

そしてその後、そんなこんなで結構な買い物をした。俺の財布の中すっからかんの状態で帰宅することとなった。

俺の部屋では渚が楽しそうに服の試着とかをしている。店でやれよ、と思いつつも「眼福じゃ眼福じゃ」と思っている自分がいることにちよつと悲しくなってきた…。

『自分の力』

十二月二十日、月曜日。町の中央にある公園のベンチ。涼しい風と小鳥の囀り、そして子供たちが遊ぶ声だけを聞きながら青く晴れ渡る空を仰ぎ見る。ガーディアンになると、学校は自由登校となるらしい。マジラッキー。

「タイ焼きうまうま」

カリッと焼けたタイ焼きを頬張る渚は今日も機嫌良し。無防備になかなか可愛い笑顔を見せている。こんな平和な公園なのに、どこかでミスティッカーによる犯罪が行われていると思うとやはり何事にも表と裏があるのだと知らしめられているのだと考えてしまう。

渚が買ったタイ焼きはシバ屋という人気の店でかなり旨いこと評判をよんでいる。

何も無い平穩が、けれども幸せな時間がずっと続けばいいと思える。平穩こそが幸せ。日常こそが楽しい。不幸だ不幸だ嘆く暇があるのならば、平穩を探した方がいいのではないのだろうか。その平穩は探そうしてもなかなか見つかるものでもないのかもしれないが…。

途中で何の話だか分からなくなってしまった。まあ、とにかく犯罪が完全になくなればいいと言いたいのだろう。

…俺のこの『力』ならミスティッカー犯罪を完全に止めることもできるのではないだろうか。クロキはネクロマンサーを実体化するだけでノラブレは逃げて行った。俺もあれくらい強くなれたのではないのだろうか。『炎獣・暗獣』。それがこの紅と黒の竜が鎖で繋がったイラストのミスティッカーの名前。支部長がわざわざ調べて詳細をメールで送ってきてくれた。元々は別のミスティッカーだったが、何らかの突然変異で混ざったのだと、支部長は伝えてくれた。それならこれはレア中のレア。レアということは強力なのだろう。これで俺は強くなれた。もうあの時泣いてた俺とはおさらばだ。も

う、渚を傷つけることは…ない！

「おい、お前ガーディアンか？」

後ろから突然声があった。野太く、地面を轟かす様な声はあの髑髏野郎を思い立たせた。確か、名をラスールと言った男がまたしく追いつきにきたのかと思いきや恐怖を感じたが、後ろを振り返ると異様な男がいた。

髪の毛は緑。なかなかの筋肉質。はっきり言っちゃえばマッチョだ。野太い声に見合った暑苦しそうな顔をしている。

「がははは！そう怯えるなよ。ちよつと、相手してくれれば俺はそれで満足なんだからな」

相手をする？どういうことだ…。

「そのレアミステイツカーがどれだけ強いのか…。俺が満足できるのかどうかを試したい」

「バカを言うな。市民まで巻き込む気か？」

ここは公園。子供が大量にいるし子供を連れてきた親もいる。巻き込まずに戦うことは難しいと思われる。

「周りなんか知ったことか。さあ、始めよう…ぜ！」

いきなり殴りかかって来た。巨体のくせに動きは早く、なにより普通のパンチ一発の威力が半端じゃない。

一発目は後退して避けたが、とんでもないモノをみた。アスファルトを破壊したのだ。腕にミステイツカーは見られない。要するにあれはあいつ自身の力。

アスファルトだと破片が飛んできて怖い。砂地まで行こう…だが、子供たちがいる。渚は…、いない…？

「今のを避けたか…ちよつとやるみてえだな」

アスファルトは破壊され悲鳴をあげている様に聞こえるのは耳鳴りが酷いせいかな…。

今更ながら異変に気付いたのか、子供を連れ人が遠ざかった行く。

「ふん、人もいなくなつたしこれで本気でいける！」

『炎獣・暗獣』を腕にはり、なぞる。右手には紅い銃。左手には黒い銃が出現する。

業火と髑髏のエンブレムからはいつも通りの心地良い威圧感が俺を包みこんでいく。

…戦える！前はノラブレ如きに遅れをとったが、もうあんなことはない！

「行くぜ…。ミスティックカードライブ…」

火のミスティッカーを重ね貼りする。業火のエンブレムが炎に包まれる。

「ぐふふ、嬉しいねえ。さあ暴れようぜ！」

今の俺は力を手に入れてるんだ。負けるわけない…勝つ！

『偽りの力』

はつきり言って苦戦していた。相手にも何発かダメージは与えたはずだが、痛みという感覚が無いのかと思ってしまう。

「どうした。まだまだ、これからだぞ」

マッチョ野郎は俺に向かって走り出しタックルを仕掛けてくる。くそつたれ…と呟きながらストレージから更に火のミスティック力を重ねる。

「これでどうだ！」

業火の弾を何発か当てた。だが、止まらない。俺にタックルを仕掛けてくる。

「クソっ…！」

あのマッチョには本当に痛みを感じないのか！？

今度は光のミスティッカーを一気に三枚貼る。ちよつとばかり痛みが走ったが知ったこっちゃない。

「今度こそ…倒すっ！」

炎獣だけじゃなく暗獣も使えばきつと倒せる！

「う、うう…」

致命的なダメージを与えられた。心臓付近を強烈な拳の一撃が直撃し、俺は倒れ伏した。息が出来ない…。

「クソつたれ…」

せめて少なくとも良いからダメージを…と思いマッチョに銃口を向ける。

ガンン！という音がしたときにはもうマッチョはいなかった。その代わり目に入った者がいた。ここからでも分かる綺麗な銀髪。

…渚だ。マッチョ野郎の所為で見えなかったが渚がキョロキョロ

しながら立っていたのだ。今更弾丸の方向を変えることはできない。
「…っ！渚あああああ！」

叫ぶのがやつとだった。しかし、遅かった。渚はこっちに気付いた
みたいだった。渚の腹に一撃。炎が直撃する。そのまま、力なく
…渚が、渚が…倒れた。

「あ…ああああああ！」

意味もなく叫んでいた。そして、気付いた時には叫ぶのがやつと
だった。身体は起き上り渚の方に駆けだしていた。

数秒を掛けて渚の傍についた。…息はしてるし脈もある。生きて
はいる。けど、意識はない様だ。

「クソ…バカ野郎…！」

他の誰でもない自分に言う。何が自分の力だ…。何が…俺は強
くなっただよ…。傷つけてしまった。俺が一番守りたかったものを自
分の手で…。

「…お遊びは終わりだ。俺は力を手に入れて舞い上がったんだ。
もう分かった。俺は強くなかない。お前が望んだ強さってのを俺
は持ってないんだ…。だから帰ってくれ」

マツチヨ 野郎は意外といい奴なのか、それとも、本当にもう俺に
呆れてしまったのか俺に背を向け去っていった。しかし、マツチヨ
野郎は足を止めた。そして俺に向き直り、告げる。

「俺様の名前はビーストだ。テメーの名は？」

「……………アキラ」

小さく独り言のように呟く。それでもビーストという男には聞こ
えたらしい。

「アキラ、か。お前の名前覚えておいてやる。…強くなったら、今
度こそ俺と戦おうぜ。弱い奴潰してもつまらねえからな」

今度こそ男は去っていった。

ビーストの最後の言葉に小さく反論する。

「俺は…俺は強くなかなれないっ…！」

『本当の強さ』

ガーディア 『エンジェル支部』

俺はバカだった。レアミスティッカーを手に入れて人格が変わったのか…？クロキは俺がノラブレになる心配はない、みたいなことを言ってた。だが、力を手に入れて、更なる力を求めて…一歩間違えばノラブレそのものになっていたじゃないか。

カオリさんが用意してくれた純白のベットに渚が寝ている。…いや、気絶しているという表現が正しい。

俺がやってしまったんだ…。もう、力は求めない。力を求めると周りが見えなくなる。あの時、ビーストって奴に喧嘩を売られた時…あの時に売られた喧嘩を買わなければ、渚は傷つくことはなかった。

「…アキラ君、話があるのだけれどいいかなあ」

心臓が止まるかと思った。いつの間にか部屋の扉の前に立っていたカオリさんが話しかけてきた。

「い、いいですよ。俺も話したいことがありましたから」

カオリさんに連れられたのは支部長室だった。

「…カオリさん。俺、ガーディアン辞めます」

最初に声を発したのは俺だった。俺が言うのをカオリさんが待っててくれた、というのが正しいかもしれないけど。

「辞めるのは構わない…、けれど、それで渚ちゃんは守れるの？」

「…どういう、意味ですか…？」

カオリさんの目が冷たい感じがした。でも、その冷たさが心地よかった。変に同情してくれるよりマシだ。

「前に、渚ちゃんから聞いたんだよ。あなたが、渚ちゃんを守った

んでしよう？あの裏路地で追い詰められた時」

「でも、結局渚がいなかったら勝てなかった。それに、あの時ネクロマンサーが無かったら渚は…」

カオリさんはちよつと溜め息をついてから、口を開いた。

「なら、ここにいればいいんじゃないの？ここにいればネクロマンサーのレプリカが使えるよ？」

「そうじゃないんです！」

遂、叫んでしまつてる自分が幼くて泣きたくなくなる。こんな幼さで何を守るうというのだろうか…。

「そうじゃない…。ネクロマンサーがあつてもそれは俺の力じゃないし、また、周りが見えなくなるだけ…」

「なら、自分を強くすればいいんじゃないか？ミスティッカーを使うにはそれなりの精神力が必要なの。精神力はアキラ君の力だよ。

それに、強くなるうと思わないと…渚ちゃんが、可哀そうだよ…」

意味が…分からなかった。何故俺が強くなるうと思わないと渚が可哀そうになるのか…。

「なにより、アキラ君はホントにガーディアン辞めれば全て解決すると思うの？本当にガーディアン辞めたいの？」

「…本当は辞めたくないですよ。ガーディアンの皆とも仲良くやつていこうと思つていましたし。でも渚が…」

「渚ちゃんがなに？結局は自分がやりたいことを渚ちゃんの所為にして辞めようとしてるだけなんじゃないの？ガーディアン辞めたの後悔するときに渚ちゃんの所為にしたいの！？渚ちゃんに責任押し付けてんじゃねえぞ！！！」

目を見開いた…。いつものカオリさんからは思えない声と口調だった。これが…大人つて奴なのかなと思う。実際どうなのが大人は知らないが…。我知らず、頬に熱い涙が一粒。

「…すいませんでした。カオリさん…ホントに大人だったんですね。ちよつと、見直しました」

「大人じゃないって思つてたのお？」

俯かせていた顔を上げると、いつものカオリさんが目の前にいた。
「…渚に責任を押し付けて、逃げてただけだったんですね…俺。
ホントは戦闘つてもものが怖かったのかもしれない。…もう、逃げ
ません。俺は俺の為にここにいたいんです。渚も守っていきたくい
んです」

また渚のことを話に出したから怒られるかと思っただけど…よかつた普通のカオリさんだ。

「自分の…『本当の強さ』ってヤツで渚を守って、ついでに市民も助ける。こんな考えの俺でも、ここにいていいですか？」

「うん、むしろ大歓迎だよ。強さを求めてる男の子は好きだからカオリさんのいつもの笑顔がなんだか安心できる…お母さんの様な顔だなって思った。」

『本当の強さ』（後書き）

無理矢理感丸出しひやっほっい。

久しぶりの後書きです。

なんかシリアスマードにしたいと思った結果がこれだよ！

…まあ読んでくれた人には感謝感謝です。

『目覚め』

支部長室で説教され、それでも清々しい心になれた俺は渚が眠るベットがある部屋に向かっていた。

扉を開き、無機質な空間が広がり…それでも鉄の臭いはしなかった。代わりに、この前嗅いだばかりの渚の匂いが広がった。

渚の寝顔は見る男全てを虜にするかもしれないほど美しく、薔薇のベットに埋もれるお姫様という印象がある。

そのお姫様が眠るベットの横にある椅子に座り、渚の左手を握る。…渚。俺、強くなるから…。お前の為じゃなくて自分の為に強くなってお前を守ってやる。」

さつき渴いた涙がまた出てくる。何故、涙が出てくるのかは俺自身分からぬ。

「もう、お前を傷つけないくらい、強くなってやる！もう、逃げない…！だから、今日の俺を…許してくれ…！！」
嗚咽交じりに宣言した俺の声はちよつと情けなかつたかもしれない。

…握った渚の手は、とても温かかった。

あれからどれくらいの時が経つたのだろうか。気付けば俺は純白のベットに突っ伏して寝ていた。

「……………」
声が聞こえた気がした。とても透き通った、しかし、幼さが含まれた可愛らしい声。

「おにいちゃん…？」
気のせいじゃない。確かに聞こえた。まだ眠い目を擦りながら上体を起こす。

「あ、よかった。起きた」

ゆっくり、しかし確かに意識が戻っていく。脳が覚醒すると同時に俺は渚の肩を掴んで叫んでいた。

「渚！だ、大丈夫か？！何所も痛くないのか？！」

俺の声は酷くでかいモノだった。自分でも吃驚するくらい。

「うん、私は大丈夫だよ。痛い所なんて別にないし…ん？おにいちゃん、泣いてた？」

渚の細い…ちょっと強く握るだけで骨が折れそうな、でも暖かい右手を俺の頬を包んでくれる。涙が通った後が残ってしまったのかもしれない…。

「俺が泣くと思うか？」

ちよつと強がってみる。しかし、渚は真剣な顔になって薔薇の様な唇を動かす。

「この世に泣かないで生きることができる人間なんていないんだよ？おにいちゃんは何人間でしょ？」

「それが残念ながら俺は火星人間だったのだよ」

あんま面白くない冗談を言ってみせた。空気が凍てつくかなあ、とか思っただけ渚はちよつとだけ笑ってくれた。

…さて、そろそろシリアスな空気も払おうかな。重いんだよ。さつきから。

「渚…、タイ焼き。食いに行こうぜ。今度こそ…お前は傷つけないから、さ」

ちよつとだけ間を開けてから渚は

「うん！」

と、大袈裟に頷いて周りに綺麗な花が咲き誇ってもおかしくない様な笑顔を俺に見せてくれた。

なにこの子可愛い。抱きしめたいくらい愛おしいよ。

…アキの気持ちがあつた気がした。なんとか足に力を入れ抱きついてしまえばいい体を抑えつけた。

『再開と決意』

カオリさんに許可を貰い、渚を連れ出し公園に来た。シバ屋の夕イ焼きは旨いが高い。この前すっからかんになったばかりの俺の財布の中身じゃ、三個が限界だった。

「やっぱりタイ焼き旨〜」

渚は、ベンチに座った俺の隣で猫に顔を綻ばせている。その無防備な笑顔を見ていると俺の財布の中身を全部使ってやってもいいかもしれないな、と思ってしまう。

……でも、今月の生活費ピンチかもなあ……。

そして、俺の目に待っていたと言っても過言じゃない男が現れた。緑色の服に緑色の髪。マッチョ野郎。…ビーストだ。

「よお、アキラ。その子はもう動いても大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ。どうも俺の恐怖に包まれた弾丸は弱っちくなっていたみたいだね。傷一つなかったらしい」

渚の頭に手をぼん、と置きながらビーストの質問に答えてやる。

「けど…もう、俺に恐怖はない。俺は本当の強さってヤツを手に入れてやる。その為に、俺はお前を倒す。さっきとは別の結果を生んでやる」

渚の頭から手を離しベンチから立ち上がる。そして、ストレージから炎獣を取り出す。

「…俺もお前とは戦いたいと思っている。だが、残念だ。俺は今仕事なんだ。…まあ、その内戦うことになるだろうけど、な」
「なに？」

戦うことになる…？まさか…

「お前、ノラブレ…なのか？ ガーディアンと敵対してるって言う、組織の一人なのか？」

「ガーディアンと敵対してるかどうか…それはまだ分かんが、組織には属している」

俺は絶句した。ただの戦闘狂だとかだろうと思っていた。だが、まさか組織に属しているとは…。

「まあ、待ってれば戦う時が来る。その時まで…今よりも、もっと強くなつとけよ！がははは！」

相変わらぬデカイ笑い声と共にビーストは去っていった。

「おにいちゃん。お風呂、空いたから入ってきていいよ〜」
「ん。分かった」

その後、渚と共に公園を回った。渚はホントに元気で…その元気さは俺に対して気遣っているのかなと思ってしまうほどだった。

渚はキッチンに行き、りんごジュースをコップに注いでそれを持つてくる。

そして、そのまま俺が座ってるすぐ隣に腰掛ける。

「…おにいちゃん。私を守ってくれる…？」
唐突な質問。

「どうしたんだ？急に」

「えーつとね…えへへ」

渚は言い辛そうに苦笑いを浮かべている。なんだか嫌な寒気が背中をなぞる…。

「私がいた所…『天使の監獄』って言う意味が分からないネーミングセンスをした組織ね。あそこの組織がまた動き出すかもしれない…」

「…」
「どういう…意味だ？」

渚はちよつと間を置き、話を続ける。

「あそこはラスールが倒されたことで少し静かにしてたけど、また、動き出すかもしれないの。今度こそ…本格的に」

俺は渚の横顔を見て目を見開いた。そうだった。渚は脱出したのは合法的なモノじゃなかったのだ。…もう、何が合法で何が違法なのか分からん感じになってきたけど…。

「…大丈夫だ。お前は戻させない。あの場所っていうのは俺は見たことないけど…それでもお前を苦しめたのは分かる。もうお前が苦しむような場所には戻させない」

低く、でも確かに俺は言った。もう、戻させないと。だが…これは渚の為じゃない。俺が渚と…渚と離れたくないからなんだ。…でもそんなカツコわるいこと、言えるかよ。

渚。俺は戦うよ。お前の為と……なにより、俺自身の為に。

『再開と決意』（後書き）

ビーストのキャラが崩壊してますね、はい。

ビーストが好きな人は頭の中でキャラを再構成することをおススメしますw

渚の髪を強制的に乾かした後。渚の了解を得て、今日はベットで寝ることとなった。久しぶり…という程ではないが、やはりそのふかふか感はとても良い眠気を誘ってくれる。

意識が飛び、眠る瞬間にドアが開く音が聞こえる。どうせ渚だろうと思いついておいた。

「…!？」

そのまま、渚と思われる人物がベットの俺の足がある方向から中に潜り込んできた。何故、寝たフリをしてしまったのだろうか。ちゃんと起きれば追い返すことも容易かっただろうに…。

「プハッ」

潜り込みに成功。どうやら海面（布団の外）に出れたらしい。薄目を開けると、案の定。渚の顔が俺の胸部の近くにあった。

渚はもぞもぞしながら俺に抱きついてきた。

さて、ここで問題です。俺は一体どうすればいいのでしょうか。

あれから約一時間が経った。

渚は俺に抱きついて…というかしがみ付く？まあ、とりあえず約一時間前と同じ体勢なのだ。

「これは…どうしたものか。まあいいか。これはこれで温かいし小さく呟く。すると、信じられない現象が起きた。

「あ、おにいちゃん起きてたんだ」

「うひゃい!？」

我ながら情けない叫びだ…。俺は一体、何回情けない思いをすればいいのだろうか。いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。

「お、お前こそ起きてたのか!？」

渚はちよつと俺の顔を見て苦笑を浮かべる。

「だつておにいちゃん。心臓の鼓動が速くなつてて、その音の所為でなかなか眠れないんだもん」

なら出てけー！と言えるような俺ではない。渚は俺が起きてると気付くや否や急にもぞもぞし出して…なんでこうなる。

「足を絡めるな。余計に強くしがみ付くな。顔を近づけるな、息がくすぐつたいんだよ」

渚は俺の言うことを無視して、余計に顔を近づけてくる。

仕方がない、と俺は寝返りを打ち絡んできた足を腕を払いのけ背を向ける。

「むー…。はむっ」

「だー！耳を噛むな！」

ベットから立ち上がり電気を付ける。

「あー、電気付けたらダメだよー。雰囲気出ないよおー」

「こんな雰囲気いらんわ！てか、お前ホントに十歳なのかよ…」

呆れ百パーセント入り溜め息ジューズ。絶対売れない。

「あのなあ、渚。そういうのはお前にはまだ早い。このベットはお前に貸すからもう雰囲気作りすんな」

「うう…おにいちゃん、私のこと嫌いになつた？」

部屋から出ようとしたりした時に言われ、振り返つて見ると泣き顔半分悲しみ半分な顔だった。

…はあ。

「嫌いにはなつてねえよ」

「じゃあいいじゃん。一緒に寝ようよお」

渚はなんというか…はあ。良く分からんけど、子供なのか大人なのか良く分からなくなる。

「はあ、分かつたよ。全く…安眠妨害だろうが、これ」

ぶつぶつ文句を垂らしながらも布団の中に入る。…結構、温かいな。

「あは、ありがと！おにいちゃん」

「だから抱きつくなってえの」
そんなこんなで、夜が更けていくのだった。

『・・・』(後書き)

ロリコンさんいらっしやうい。

はい、もう俺の妄想小説になっってきましたねえ。

あれか？俺はこんな風になりたい、って思ってるのだろうか。

話は変わるけど最近はお自分の行動が理解出来ないことが多いです。

コーラ飲もうと思ったのに便所に入ったり…。

最近はお自分の頭が心配です。

まあ、この小説を読んでくださってる皆さまには感謝感激です。これからもよろしくつす！

『スクランブルエッグの作り方?』

眠い。とにかく眠い。けど寝れない。

時計を見ると既に午前五時。日が昇り始めている。これまで健康的な生活を送って来た俺にとって、これはヤヴァイ。

渚の顔を見ると、白い美肌に銀の髪が眩しい。…ベットのうだけ電気が付いているかのように明るいのにはコイツの髪と肌の所為なのだろうか。

「むにやむにや…もう食べられないでガンス」

ベタな寝言まで言ってるやがる。ていうか、こいつの息がくすぐったい。

あ、遅れました。どうもアキラです。安眠妨害されています。寝れないせいで時間が過ぎるのが遅く感じています。やっぱりソファで寝ればよかったなあ。と思ってももう遅いネ。

「さて、どうしたものか」

独り言を呟いてみる。

「むにやむにや…」

…渚の反応無し。今度こそ本当に寝ているようだ。さつきは驚いたからな…。

今日は寝るのを諦めることにしよう。幾ら自由登校とは言え、ずっと登校しないというのもなんだかやるせないから、明日は登校する予定なのだ。…いや。『今日』は登校する予定、だな。

渚が起きないようにゆっくり上体を起こし、冷たい床に足を…ホントに冷てえな…。心臓止まりかけた。どこかにスリッパはあったはずだが…、見当たらないので我慢して冷たい床を歩くことにする。

学ランに着替えを済ませ、キッチンに立つ。

…さて、何を作ればいいものか。せっかく早起き(と言っていい

の分からないが)したのに食パンだけとかは悲しすぎだろしなあ。

「……久しぶりに、作ってみようかな」

常温食品用棚から遂最近買った卵を六個取り出し、作り方を思い出す。なんせ作ったのはもう二年前くらいなのだ。ユキに作ってやったら「凄くおいしい」と言って笑顔で食べてくれた記憶がある。

さあ、アキラクッキングのお時間です。…いや、そんな番組どこのチャンネルでもやってねえよ。てか料理番組自体もうやってないしな。

とりあえずフライパンを取り出し火のミスティッカーで温める。その間に卵を全部ボールの中に割って牛乳を大さじ二杯入れて、かき混ぜる。更に、佐藤を…誰だ佐藤。砂糖を少量入れてもうちよつとかき混ぜる。

適当な時間で温めるのを止め、予め用意しておいた濡れ雑巾の上に乗せてジユツとならす。…なんで濡れ雑巾に置くんだっけ？忘れちゃった。

ミスティッカーの上にフライパンを戻しバターを入れる。変な泡みたいなのが消えたら卵を一気に流し込む。

フライパンを揺すりながら、菜箸で卵を外から中心に集めるように混ぜる。

そして、火を通しすぎない内に皿にあける。

そんなこんなで数分…いやいや、数十分くらいでスクランブルエッグを作り終え、更にウインナーも十数本焼く。火のミスティッカーって本当に楽。

『朝飯』

「渚、飯食うぞ。起きろ」

二階に上がりまだ寝てる渚を起こそうとするが、なかなか起きない。渚の体を揺すって気付いたけど、渚の涎で俺のベットのベッタベタ。今日帰ったらシーツと掛け布団を洗ってしまおうと決心したところで、渚を起こすべく名前を呼びながら体を数回揺する。

「うう…眠い…」

言いながら左手の甲で顔を擦る。まさに猫だ。てか、やっぱり癖なのか？その擦る行為は。

本当に眠そうだけど、渚は目の前に置かれたスクランブルエッグを一口頬張った。まあ、今はまだ五時四十分くらいだし眠いのは普通か。

「あ、美味しい。おにいちゃんってちゃんとご飯作れるんだね。ちよっと関心」

「そらどーも。十歳の子供に料理で関心されても、ねえ」
嬉しくなさそうにほざいてみる。まあ、実際は結構嬉しかったりする。顔は気色悪くニヤついてるだろうから窓の外を見るふりをしてそっぽを向く。

渚はむーつと頬を膨らませたが、もう一口スクランブルエッグを食べてすぐに「はにゃ〜」と猫みたいに目を細めて美味しそうな顔になる。そんなに旨いのか…？

俺も一口食べてみる。おお、意外といける。久しぶりに作ったとは思えない程旨かった。…自分で言うのもなんだけどな。

「俺、今日は学校行くからお前とサラちゃんはガーディアンに預かってもらうからな。カオリさんにも許可貰ったし」

「ほほ〜い」

「ががう」

ホントに分かってんのか？てか、サラは無理して渚の真似してんじゃねえよ。ちなみに、サラの朝飯はドックフードと牛肉（生）だ。…サラ的にはこの組み合わせが好きだというのだから仕方ない。

朝飯を食べた後、まだ六時を過ぎてちよつとしか経ってなかったから渚をエンジン支部に連れていった。連れていく途中でまた「タイ焼きを買って」と甘えられたが無視して歩く。…のを止めて、結局タイ焼きを買ってやった俺は渚に世話を焼きすぎだろうか。

「いらつしゃい」

「渚ちゅわああん！」

支部の地下入り口に入った瞬間、アキとカオリさんが立っていた。アキは音速の如く渚に抱きついていていた。

「カオリさんは分かりますけど…なんでアキが出迎え？」

聞くと、アキは渚に頬ずりしながらご機嫌すこぶる感じな顔で俺の問いに答える。

「だって渚ちゃんが来るんだヨ！？私が出迎えなくて誰が出迎えるって言うのよ！」

「は、はは。ソーデスネー」

曖昧に笑っておいた。何故かは知らないけど、今はこうして流すのが正解だと誰かが言った気がした。

カオリさんは頬に右手を当てて困ったように言った。

「もう、私はアキちゃんに待っててって言ってただけど…。いつの間にか隣に立ってて…」

「…さすがですね。可愛い子の為にカオリさんに存在を感じさせないように立つたなんて」

カオリさんは困り顔のまま「まったくだよ。ある意味怖いわあ」と言っていた。…多分、カオリさんもいきなり抱きつかれたりした

のだろう。

その後、カオリさんとアキに「渚をお願いします」と頭を下げてから学校を目指す。

∴ 幼児を保育園に預けていく親の気分だ。

『学校』

「あ、あの。この前はありがとう！」

「はあ？」

昇降口に入り、靴を脱いだ瞬間に女の声がした。しかも、唐突なお礼。意味が分からない。

「だ、だから…そのこの前助けてくれたじゃん？」

顔を真つ赤にしてお礼をしている女の格好は制服。当たり前。髪は長くてポニーテールの緑色。

…いつもはポニーテールじゃないから気付かなかった。こいつは『佐伯 彩』だ。この前っていうのは、ガーディアンテストの話だろうか。

「あ、ああ。別に、大したことはしてないよ。結局避難訓練だったんだし」

訓練という割には避難失敗してたけど。

「い、いや。訓練だろうと私を助けてくれたことに変わりはないよ。ありがとう」

それにしても、なんだかきこちない。

「そ、それでさ」

急に顔を近づけてきて耳打ちしてくる。

「私を助けてくれた時貼ってたのってミスティッカーなの…？」

息がくすぐった、と言おうと思ったが音が無くなる。いや、そりゃあ誰かには見られるだろうとは思ってた。けど、まさか彩に気付かれるとは…。

「ミスティッカーなんか貼ってみる。今頃ここに立ってないよ。とつくに入院してるか死んでる」

誤魔化した。このままブレイザーだと話すとガーディアンのも話してしまいそうだったから。ガーディアンの情報は他言無用なのだ。

「そう…だね。うん、そうだよね」
急に元気になる。一体なんだと言っのか…。

なんだか豪く久しぶりな感じがする授業は相変わらずだった。一番前の直人はノートに変な絵を描く度に俺に見せつけてくる。

…お、また見せつけてきた。…ん？なんだ？これは。世界最高峰のネズミとハロー白猫をかき混ぜた、と口パクで説明してくる。見れば、確かに混ぜてるけど…すでに原型がねえよ。

そこで授業終了のチャイムが鳴る。時計が示す時間は一時ちょっと前。昼飯の時間だ。

「アキラ、食堂行こうぜ。食うついでに渡したいものがあるんだ」
「渡したい物…？」

疑問を浮かべた俺に何も言わずに、いつものへらへら顔で食堂へ向かう直人の背中を追う。

俺と向い合せの直人の前にはカレーうどん。俺の前にはカレーが置かれる。

「それで、渡したいものってなんだ？」

「これだ」

言つて、直人はストレージを開きミスティックカーを数枚取り出し、それをカレーの隣に置く。

「…これは…」

俺から見て右のミスティックカーは、炎と闇に包まれた二つの頭を持つ龍の様なイラストをしている。

真中に置かれたミスティックカーは、三本の爪に炎が纏わりついたイラスト。

左に置かれたミスティックカーは…魂喰『ネクロマンサー』だ。

「お前から見て左のミスティックカーはネクロマンサーのレプリカだ。

クロキがお前の為に新しいレプリカを自腹切って作ったらしいから、大切にしろよ」

あのクロキが…。あのクロキが、自腹切ってまで俺にレプリカを作ってくれたのか？信じられん…。

「真中のミスティッカーは、炎エネルギーを無限に作りだすレアミスティッカーだ。そして、最後に」

右にあるミスティッカーを真剣な表情で見ながら直人は話を続ける。

「お前にしか使えないミスティッカーだ」

「どういう意味だ？俺にしか使えないって…」

吃驚より、疑問が先に出た。だって俺にしか使えないってどういう意味だ、ってなるだろ。普通。

「お前が持つその『炎獣』専用…レジェンドミスティッカーだと思われているミスティッカーだ。しかし、実際はどうかは分からない。『炎獣』と『暗獣』は融合したがレジェンドまで融合されたことを確認されていないからな。だから、あとでバトルルームで『炎獣』に重ねて貼っておいてくれ」

「…分かった。で、真剣な話はこれで終わりか？」

問うた瞬間、直人の顔はいつものへらへら顔に戻る。

「おう。…さあ、飯食べちまおうぜ。午後は一緒にサボろうぜ。あの授業だから…な」

「そうだな、あの授業には出たくないからな」

ちなみに、あの授業って言うのは…前に言った気がするから復習してくれ。

「じゃあさ、早速レジェンドかどうか確かめにエンジェル支部に行こうぜ。渚ちゃんもそこに預けてるんだろ？」

「ああ、そうだな。そうするか」

そこで、チャイムが鳴った。俺と直人は急いで飯を片付け、教師にばれないように学校から出てエンジェル支部の方向に走る。…その時、後ろの人影に気づけばその後の展開はいろいろ変わったのかも

しれない。

『サブタイトルが決まらない』

今更だが、支部の外装をお伝えしようと思う。

まず、外から見た支部は普通の家だ。壁は白で赤茶色の屋根。カオリさんのプライベートホームだ。

中に入れば地下に繋がる通路がある。そこに入れば支部になる。家から入らなくても隠し通路はあるが、「緊急コード覚えるのめんどくさい」という理由で皆カオリさんの家から支部に入るのだという。…ただ一名、カオリさんにいち早く抱きつきたいと言う理由で家から入る人もいるそうだ。

閑話休題。

他の支部は廃となったゲーセンやガソリンスタンドを支部の入口にしているらしいから、それよりは全然安全だなと俺は思う。

そんなこんな説明してるうちに赤茶色の屋根が見えてきた。

屋根より濃い茶色の玄関。その横にあるチャイムを鳴らす。にしても一般的だ。

チャイムを鳴らしてから「は〜い」といういつも通りのやる気が削がれる声が聞こえてから、数秒後玄関が開き、いつも通りのカオリさん…が…？

「あれえ？もう学校終わったのぉ？」

「あ〜えつと〜サボったんですけど……………その格好どうしたんですか」

なんと、ゴスロリ…。直人は笑いを堪えるように肩を上下に揺らしている。

「えつとあ〜、これはあ〜」

カオリさんは困り顔でなんて説明すればいいか、といった感じだ

った。

それにしても、似合っている。ゴスロリ似合う二十歳。探せばどこかにはいるだろう。だが、カオリさんは別格だ。だって体格が体格だし…。

その時、

「ぶははははははは！！カオリさん似合いですぎです」

我慢できなかつたんだな。てか、似合いですぎて笑うって失礼だぞ。と心の中でだけ注意しておく。

『レジェンドミスティッカー』

エンジェル支部『バトルルーム』

バトルルームの隅に左から直人、渚、カオリさんの順番で立って俺の方を見ている。

右腕に『炎獣』を貼り、なぞる。

いつも通りの二丁拳銃が出てきた。右手に炎獣。左手に暗獣。

「……………」

『炎獣』を見てみると、渚を撃ってしまった時の記憶が走馬灯のように脳を駆け廻る。

「おにいちゃん？」

渚の澄んだ、幼い声が不意に近くで聞こえて我に返る。いつの間にか、渚が俺のすぐ隣に立っていた。心配そうに俺の顔を覗き込んでくる渚に「大丈夫」と言うてから、直人達の方に戻るよう促す。渚はちよつと迷ってから、直人達の方に戻っていった。

目を閉じ、ちよつとばかり深呼吸。数秒してから目を開け、レジェンドミスティッカーを『炎獣』の上に貼る。二つの龍の頭を叩きミスティッカー全体を一直線でなぞる。

「な、なんだ…？」

何かが体の中に入ってくるような感覚。意識が遠のきそうになる。足に力を入れ何とか立つことを維持する。

「う、うわああああ！」

これで何度めだろうか…。情けない叫び声をあげてしまう。立つのもきつくなり遂に、膝が床につく。渚達の方を見ると、渚がこちらに走ってきているように見えた。

…？なんだ？体が急に軽くなる。さっきまでの何かが体の中に入ってくる感覚は消え、そこで意識が無くなる。視界が真っ白になる。

世界がフェードアウトしていくようだった。

意識が戻っていく。ああ、何度か嗅いだことがある匂いが鼻を刺激する。重い瞼をゆっくり開けると、渚の顔があった。正直驚いたが、声が出なかった。喉が酷く痛い。何が起こったのか聞こうにも聞くことができない。

「お、目が覚めたっばいな。いやあ、一時期はどうなるかと思っただぜ……」

直人の声が聞こえた。声のする方を見ると、俺の顔を見て口を開いた。

「大丈夫か？まさか、ここまでヤバイミスティックカードとは思わなかったな」

「そんでもって、やっぱりレジエンドっばいねえ」

直人の右隣に立つてるカオリさんはちょっと苦笑いした。

「渚ちゃんの膝枕も気持ちいいだろうけど、目が覚めたならそろそろ起きてあげた方が……」

「え？」

意識が完全に戻り、状況把握に努める。戻った感覚から俺は寝てるといのが分かった。しかも、カオリさんが言ったことは本当らしい。目を天井に向けると、天井が見える前に渚の顔が見える。状況を理解した顔が急激に熱くなった。

「うわえい！」

どんな驚き方だよ。てか驚くの遅いよ、と自分で突っ込みたくなるほど情けなかった。てか、ただだけ情けないんだよ、俺。

『敵の襲来、前夜の出来事』

「さて、いろいろ見せてもらったけどお…そのミスティッカーは『炎獣』のレジエンドで間違いなさそうだねえ」

支部長室に招いてもらい、紅茶まで出してくれたカオリさんに会釈し、ソファに座った俺にかけられた言葉は結果報告だった。

「そう、ですか。でも、あれなんか変でした。体に何かが入ってくるような感覚が…」

「それほど精神力を必要とするミスティッカーなのかもしれないねえ。なんせ二枚分のミスティッカーなんだし」

それはそれで納得できる。けど、俺は何かが違う気がした。いや、ホントなんでなのか分からないけど。時計を見ると、もう夜の八時だ。時間が過ぎるのは早いなあ。

「うーん、いろいろ調べてみないと危険なミスティッカー、てことは分かったし今日はもういいかなあ」

社長室にありそうな高級な椅子に座ったカオリさんは両手を天に挙げ元氣玉のポーズ。いや、ただの背伸びなんだろうけど。

「もういいって…？帰って良いってことですか？」

「ん〜？アキラ君はまだ帰っちゃダメ〜」

でも、渚ちゃんたちは帰らせるよ〜と付けくわえてきた。なんで俺だけ、とがっくりして見せるが効果はなし。どうやらホントにまだ帰らせてくれない様だ。

「それで、さ。アキラ君は、もう十七歳だったよね？…ねね、ちょっと大人になるために儀式でもしようか」

そう言うとかオリさんは突然立ち上がり、俺の目の前に仁王立ちしたかと思いきや、突然俺に寄りかかってきた。いや、覆い被さってきたと言う方が正しい表現か。

「あ、あの…カオリ、さん？」

渚とはまた違う良い香りする。ふわぁっと来る優しい匂い。や、

止める！これ以上俺をロリコンにするな！

数分後、カオリさんから解放され支部長室へ脱出成功。支部長室の前では渚が待っていた。

「おにいちゃん、遅かったけど何かあったの？」

「ああ、いろいろ大変だった…」

げっそりとした俺を見て何を思ったか渚は手を握ってきた。

「早く帰ろ、おにいちゃん」

その笑顔は、かなり疲れてる俺がその疲れ全てを忘れてしまうような笑顔だった。

「…そうだな。…帰ったらサラに癒しの炎でも吐いてもらおうかな。なんだか今日は酷く疲れた」

俺と渚の後ろ姿はどの様に見えるのだろうか。親子か。兄妹か。なんでも良いと思った。今が幸せなこの時が長く続いてくれれば、親子でも兄弟でも他人でも良いと、思った。

『襲来』

いつもならば静かな小鳥の囀りが聞こえる朝。だが、今日に限って小鳥の囀りは聞こえず、代わりに大きな声が聞こえた。

「アキラ！大変だ！！出てこい！緊急だぞ！」

どう聞いても直人の声だ。ベットから下りる。あ、そうそう。昨日の夜も渚と一緒に寝てしまった。なんかもう兄弟と言うか親子と言うか…とりあえず、家族の様な関係になりつつあるのは事実だろう。

「なんだよ。うるせーな…ってあれ？」

窓を開け放ち、直人の姿を探したがどこにもいない。もはや幻聴だったのか、と思いかけたその時。

「おう、アキラ！目え覚ましたか」

「そう言うお前はもう一度眠らせてやろうか」

「グハアツ！」

顔面に蹴りを入れたやつた。その声の主、直人はベットの下から顔をのぞかせてきた。

「なんでそんな場所から現れるんだよ!？」

「緊急の為に隠し通路をお前の家に…」

「人の家に作るなよ。そんなもんを勝手に」

俺の突っ込みを受け流し、この様な空気の中で真剣な顔で喋り出す。

「ヤバいぞ。支部がやられた。支部長は現在フェンリル支部が預かってられている。奇襲を仕掛けてきたのは『黒き翼』と呼ばれてるノラブレの集まりだ。国を動かす力を持つ者との繋がりがあるとも言われている。組織のネーミングセンスの割になかなか強い奴が多くてな…。あいつらの狙いは支部長だ。このままだと力オリさんと共にフェンリル支部の支部長も殺られる」

「……………」

そんなバカな、と言いたい。実はドッキリでした！とか言ってくれるヤツはいつになったら現れてくれる。しかし、そんなものを待っても何も現れなかった。ただ時計の秒針の音と渚の寝息の音だけが聞こえる部屋の中。俺はストレージを腰に付ける。

「フェンリル支部はどこだ。カオリさんの容態は？」

「…フェンリル支部は？区にある。支部長は結構な重体で意識が無いそうだ」

それを聞くと、俺は家を出ようと足に力を入れる。しかし、それを制する様に直人が言う。

「もう行くのか？渚ちゃんはどうするんだ？連れて行かないのか？」

「渚は置いていく。もう危険には晒したくない。それにサラだっている」

直人はもう何も言う気は無いようで、「そうか」と行ってから俺の隣に立つ。

「使うのか？炎獣のレジェンド」

「…使うべき時だと思ったら使う」

「…そう、か。ならいい。よし、急ごう」

俺と直人は走り出す。カオリさんを援助するために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2233r/>

碧眼の女神

2011年5月9日10時25分発行